文化財サービス発掘調査報告書第19集

平安京右京六条三坊一町跡・西院遺跡発掘調査報告書（Ⅱ）

２０２１

株式会社　文化財サービス

例　言

1　本書は、京都市右京区西院西寿町 23 番、23 番 1、24 番 1 において実施した平安京右京六条三坊一町跡・西院遺跡発掘調査報告書（Ⅱ）である。（京都市番号 20H662）

2　本調査は、株式会社ユタカホールディングス（京都市右京区西院太田町 72 番地）による社屋建設事業に伴い実施したものである。

3　発掘調査は、事業者（開発原因者）からの委託により、株式会社文化財サービス（以下「文化財サービス」という）が実施し、山内伸浩（文化財サービス）が担当した。

4　現地における調査期間は、令和３年６月 26 日に開始し同年８月４日に終了した。

5　調査面積は 220 ㎡である。

6　本文・図中の方位・座標は世界測地系第Ⅵ系による。標高はＴ．Ｐ．（東京湾平均海面高度）である。

7　土層名および出土遺物の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。

8　本書の執筆は山内が行い、編集は野地ますみ（文化財サービス）が行った。

9　現地での記録写真撮影は山内が行い、出土遺物の写真撮影は写房楠華堂に依頼した。

10　本調査に係る全ての資料は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が保管している。

11　発掘調査および整理作業の参加者は、下記のとおりである。

〔発掘調査〕　早見由槻、小林一浩 、上田智也、吉岡創平、清須慶太、楠瀬康大（以上、文化財サービス）

発掘作業員（株式会社京カンリ）

〔整理作業〕　吉川絵里、多賀摩耶、望月麻佑、内牧明彦、甲田春奈、大崎みれい、溝川珠樹（以上、文化財サービス）

12　出土遺物の年代観は、主に下記の文献に依った。

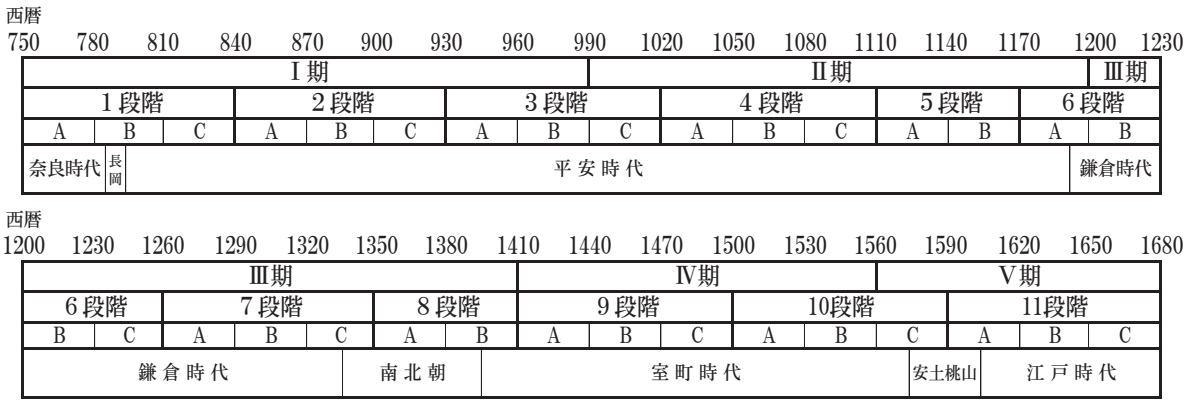
平尾政幸「土師器再考」『洛史』研究紀要第 12 号（公財）京都市埋蔵文化財研究所 2019 年

『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社 1998 年

「平安時代の緑釉陶器－生産地の様相を中心に－」『古代の土器研究　古代の土器研究会第 7 回シンポジウム』　古代の土器研究会　2003 年

13　現地調査、整理作業において、下記の方々から多くの御教示、御指導をいただいた。記して感謝を表する次第である。（敬称略）

國下多美樹（龍谷大学）、浜中邦弘（同志社大学歴史資料館）



平安京土師器編年に基づく時代区分（11段階Cまで）

（平尾政幸「土師器再考」『洛史』研究紀要第12号 2019年(公財)京都市埋蔵文化財研究所 に基づく）

目　次

第Ⅰ章　発掘調査の経緯と経過

1　発掘調査実施に至る経緯…… 1
2　発掘調査の経過…… 1
3　測量基準点の設置と地区割り…… 2
4　整理作業・報告書作成…… 2

第Ⅱ章　位置と環境

1　周辺の環境…… 6
2　周辺の既往調査…… 8

第Ⅲ章　発掘調査の成果

1　基本層序…… 12
2　検出遺構…… 13
　条坊及びその関連遺構…… 16
　土壙…… 24
　耕作溝…… 25
　その他の遺構…… 26
3　出土遺物…… 27
　溝01埋土下層出土遺物 …… 27
　溝01埋土上層出土遺物 …… 29
　溝01埋土上面出土遺物 …… 31
　溝02出土遺物 …… 31
　溝14出土遺物 …… 32
　路面13出土遺物 …… 32
　溝04出土遺物 …… 34
　溝05出土遺物 …… 34
　溝11出土遺物 …… 34
　土壙10出土遺物 …… 35
　埋め甕06出土遺物 …… 35
　包含層出土遺物…… 35

第Ⅳ章　総　括 …… 40

図版目次

図版１　遺構　１．調査後の調査区の景観（北から）
２．調査後の調査区（真上から・上が西）
図版２　遺構　１．調査完了後の調査区全景（北から）
２．調査完了後の調査区全景（南から）
図版３　遺構　１．調査完了後の調査区全景（北東から）
２．完掘後の路面13、溝01、溝02、溝14（西から）
図版４　遺構　１．溝01完掘状況（東から）
２．溝01完掘状況（西から）
３．溝01埋土観察ベルト（西から）
図版５　遺構　１．溝01東端（調査区東壁面）埋土断面（西から）
２．溝01東側観察ベルト埋土断面（西から）
３．溝01西側観察ベルト埋土断面（西から）
図版６　遺構　１．溝02、溝14完掘状況（東から）
２．溝02、溝14完掘状況（西から）
３．断ち割り後の路面13（西から）
図版７　遺構　１．溝04、溝05完掘状況（西から）
２．溝02、溝11、溝04、溝05（西から、溝14検出前）
３．溝07、溝09、溝08完掘状況（東から）
図版８　遺構　１．土壙10完掘状況（北西から）
２．土壙15完掘状況（西から）
３．埋め甕06（西から）
図版９　遺構　１．須恵器壺M出土状況（溝01埋土上層）
２．須恵器壺N出土状況（溝01埋土上層）
３．須恵器壺出土状況（路面13上面）
図版10　出土遺物　１．溝01埋土下層出土
２．溝01埋土下層出土
図版11　出土遺物　１．溝01埋土上層出土、路面13出土
２．溝01埋土上層出土
図版12　出土遺物　１．溝01埋土上層出土
２．溝02埋土出土、溝14埋土出土
図版13　出土遺物　１．溝01埋土上面出土、溝04埋土出土、溝05埋土出土、土壙10埋土出土
路面13出土
２．溝01埋土上層出土、包含層出土
図版14　出土遺物　１．包含層出土
２．溝11埋土出土、包含層出土

挿図目次

図１　調査地位置図（１：20,000）…… 3
図２　調査地周辺図（１：2,500）…… 3
図３　調査区地区割り・基準点配置図（１：200）…… 4
図４　発掘調査経過写真 …… 5
図５　平安京条坊図 …… 6
図６　既往調査地位置図（1：5,000）…… 9
図７　調査区断面図（1：80）…… 14
図８　調査区断面層名一覧 …… 15
図９　調査区平面図（1：100）…… 17
図10　溝01・溝02・溝14・路面13ほか平面図（１：80）…… 18
図11　溝01・溝02・溝14・路面13断面図（１：50）…… 19
図12　溝01・溝02・溝14断面図（1：50）…… 20
図13　溝02・溝04・溝05・溝11・溝14・土壙15ほか平面図（１：80）…… 21
図14　溝02・溝04・溝05・溝11・溝14断面図（１：50）…… 22
図15　土壙15実測図（１：40）…… 25
図16　溝07・溝08・溝09断面図（１：50）…… 25
図17　埋め甕06実測図（１：40）…… 26
図18　出土遺物実測図１（１：４）…… 28
図19　出土遺物実測図２（１：４）…… 30
図20　出土遺物実測図３（１：４、１：８）…… 33
図21　出土遺物実測図４（１：４）…… 36
図22　１次・２次調査区平面図（１：300）…… 41
図23　既往調査区検出遺構との関係（１：2,000）…… 42

表目次

表１　周辺発掘調査の一覧 …… 11
表２　遺構概要表 …… 13
表３　遺物概要表 …… 27
表４　出土遺物の点数とその割合 …… 28
表５　出土遺物観察表 …… 38

第Ⅰ章　発掘調査の経緯と経過

１　発掘調査実施に至る経緯

2021 年（令和３年）、株式会社ユタカホールディングスは、京都市右京区西院西寿町 23 番、23 番 1、24 番において本社社屋の建設を計画した。工事予定地は平安京の右京六条三坊域内に該当し、また西院遺跡の推定範囲内にも該当していたため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）により、事前の試掘調査が実施された。この結果、平安時代の樋口小路南側溝と思われる遺構等が確認されたため、工事実施の前に発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図ることとなった。

こうして本発掘調査は、株式会社ユタカホールディングスから株式会社文化財サービス（以下「文化財サービス」という）が委託を受け、令和３年６月 26 日から業務を実施する運びとなった。

２　発掘調査の経過（図４）

発掘調査は、調査区の設定、器材搬入など諸準備を行った後、令和３年６月 26 日に開始し、同年８月４日に終了した。この間の延べ作業日数は 26 日間である。調査対象範囲は、事前の試掘調査に基づき文化財保護課が設定した東西 11 m×南北 20 mの 220 ㎡である（図２・３）。

調査は先ず厚さ 0.5 m前後の近現代盛土と、厚さ 0.2 m前後の旧耕土及び床土（第３層）を重機掘削によって除去し、人力により調査区法面を整形した後、遺構検出作業を開始した。また重機掘削終了に合わせて、基準点測量と４mピッチのグリッド杭設置作業を行った。人力による遺構検出作業を始めたところ、最初の重機掘削レベルが目的の遺構検出面に達していないことが判明したため、７月６日再度重機を投入し、調査区全域の土層をさらに厚さ約 0.1 m掘削した。

遺構検出面である第５・６層上面を精査すると、東西方向に延びる樋口小路の南北側溝（溝 01・02）や路面、内溝などのプランが姿を現した。また明らかに時期が下ると思われる浅い南北溝が数条重なっていることが判明し、これらは耕作に伴う溝と推定された。さらに調査区内には現代の大型の撹乱坑が随所に存在し、地山は硬質な砂礫層と軟質なシルト質土層が複雑に堆積していることなどが判明した。

７月 14 日にはほぼ遺構検出作業が終了し、文化財保護課の確認を受けた後、南北の耕作溝状遺構（溝 07 ～溝 09、溝 12、溝 16）から埋土掘削を開始した。その後溝 01（樋口小路南側溝）、溝 02（同北側溝）、溝 04、溝 05（築地内溝）、溝 11（近代溝）の順で埋土掘削を進めていった。各遺構埋土掘削にあたっては、適宜土層観察ベルトを設定し、埋土の観察と実測図作成など記録を行った。

７月 27 日には遺構埋土をほぼ完掘し、測量作業を行った後、樋口小路路面の断ち割りを開始した。この作業の過程で、溝 02 の路面側が 1.5 m前後に亙って浅く拡幅されていることが判明し、この拡幅部を溝 14 と命名した。また文化財保護課による試掘時の所見で溝 01 の南方に別の溝状遺構が存在する可能性が指摘されていたため、確認のためトレンチを設定し精査した

が、明確な遺構は確認できなかった。こうして７月 29 日、文化財保護課の最終確認を受け、全ての測量作業を行った後、８月２日、４日に調査区の埋戻し作業、レンタル器材の搬出を行い、全ての作業を終えた。

以上の調査期間中、本発掘調査の検証委員である國下多美樹、浜中邦弘両氏の現場検証を複数回受け、多くの指導、助言を賜った。

尚、今回の発掘調査では遺構、土層断面等の実測については、写真測量のほか手実測を併用した。また写真撮影機材は、35mm フルサイズの一眼レフデジタルカメラ、35mm フィルムカメラ（白黒フィルム、カラーリバーサルフィルム）計３台を使用した。

３　測量基準点の設置と地区割り

VRS 測量（仮想基準点測量）により、調査区周辺に基準点 Y. １、Y. ２、Y. ３を設置した。各基準点の測量成果（座標値・標高）は以下のとおりである。

Y. １　：　X = － 111156.757　Y = － 24743.777　H = 23.773 m

Y. ２　：　X = － 111193.560　Y = － 24738.664　H = 23.789 m

Y. ３　：　X = － 111174.048　Y = － 24752.066　H = 23.811 m

上記基準点から算出した座標値に基づき、調査区内に４ｍのグリッドを設置した。座標Ｙ軸にアルファベットを西から東に A、B、C、D・・、X 軸に北から南に１、２、３、４・・の順に付し、両者の組み合わせをグリッド名とした。このグリッド名は各座標の北西隅の交点である（図３）。

４　整理作業・報告書作成

現地調査終了後、整理作業と報告書作成を行った。整理作業は、写真、図面整理と出土遺物の整理を並行して進めた。遺物の整理では、洗浄、接合、復元、注記、実測、トレース、写真撮影などを実施した。報告書の執筆は山内伸浩、編集作業は野地ますみが担当した。

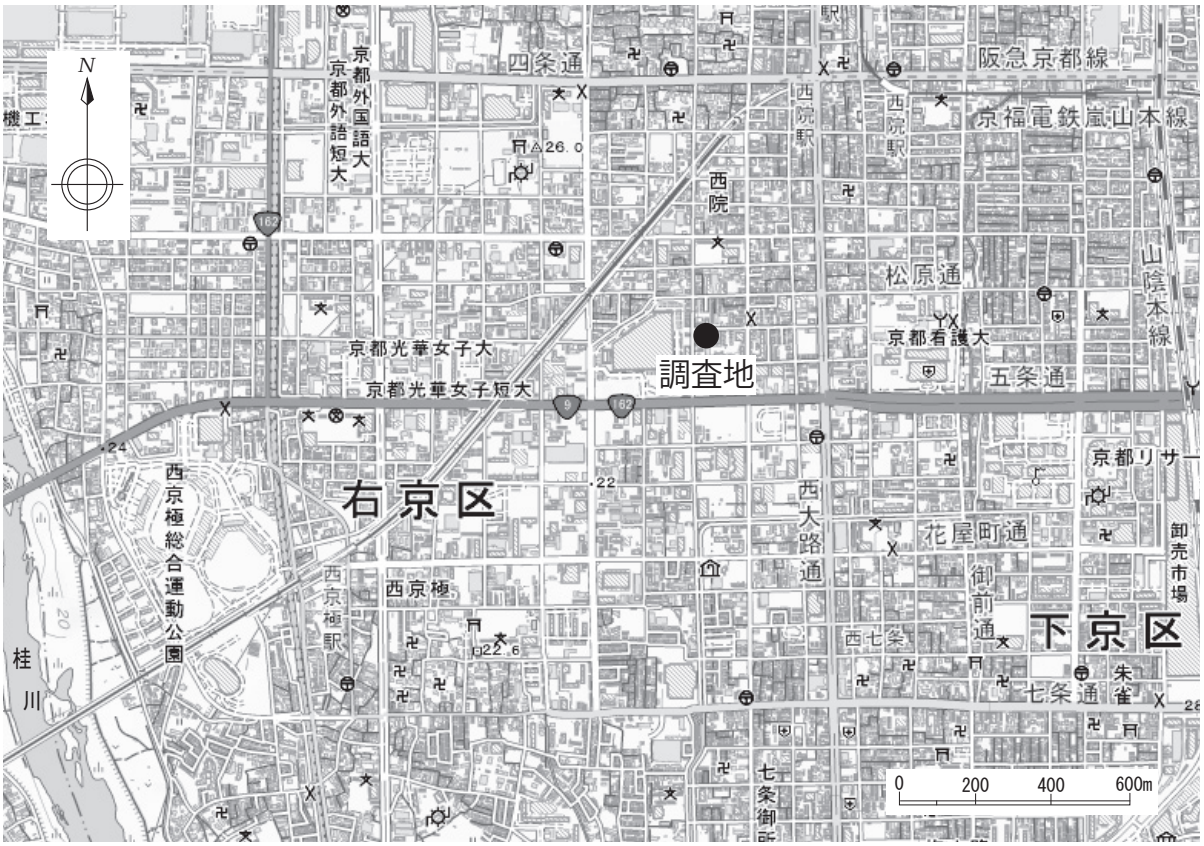


図１　調査地位置図（1：20,000）（国土地理院１万５千分の１地図を縮小・転載、一部加筆）

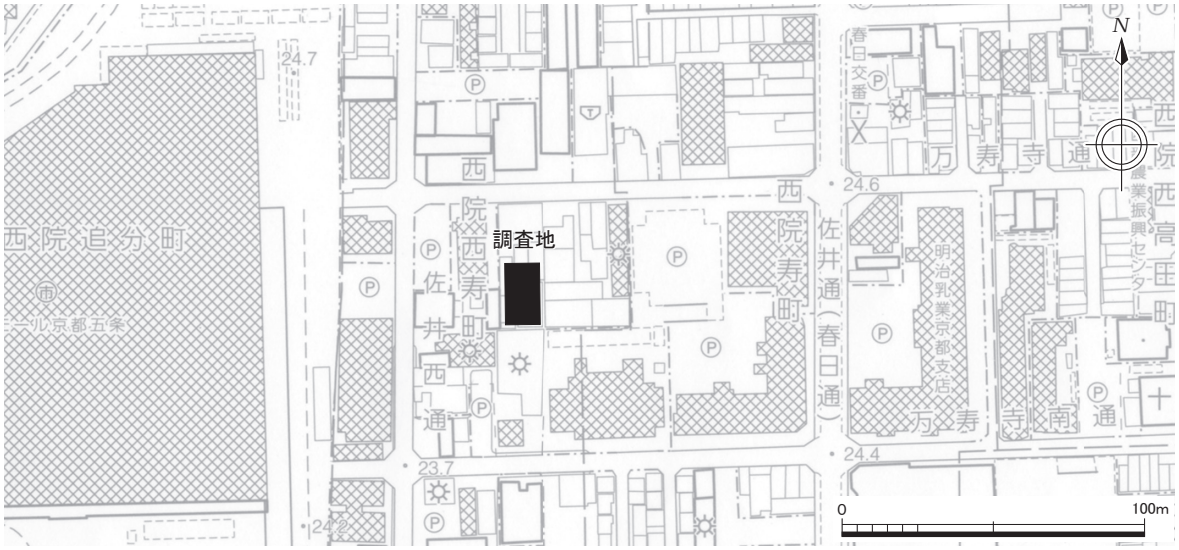


図２　調査地周辺図（1：2,500）

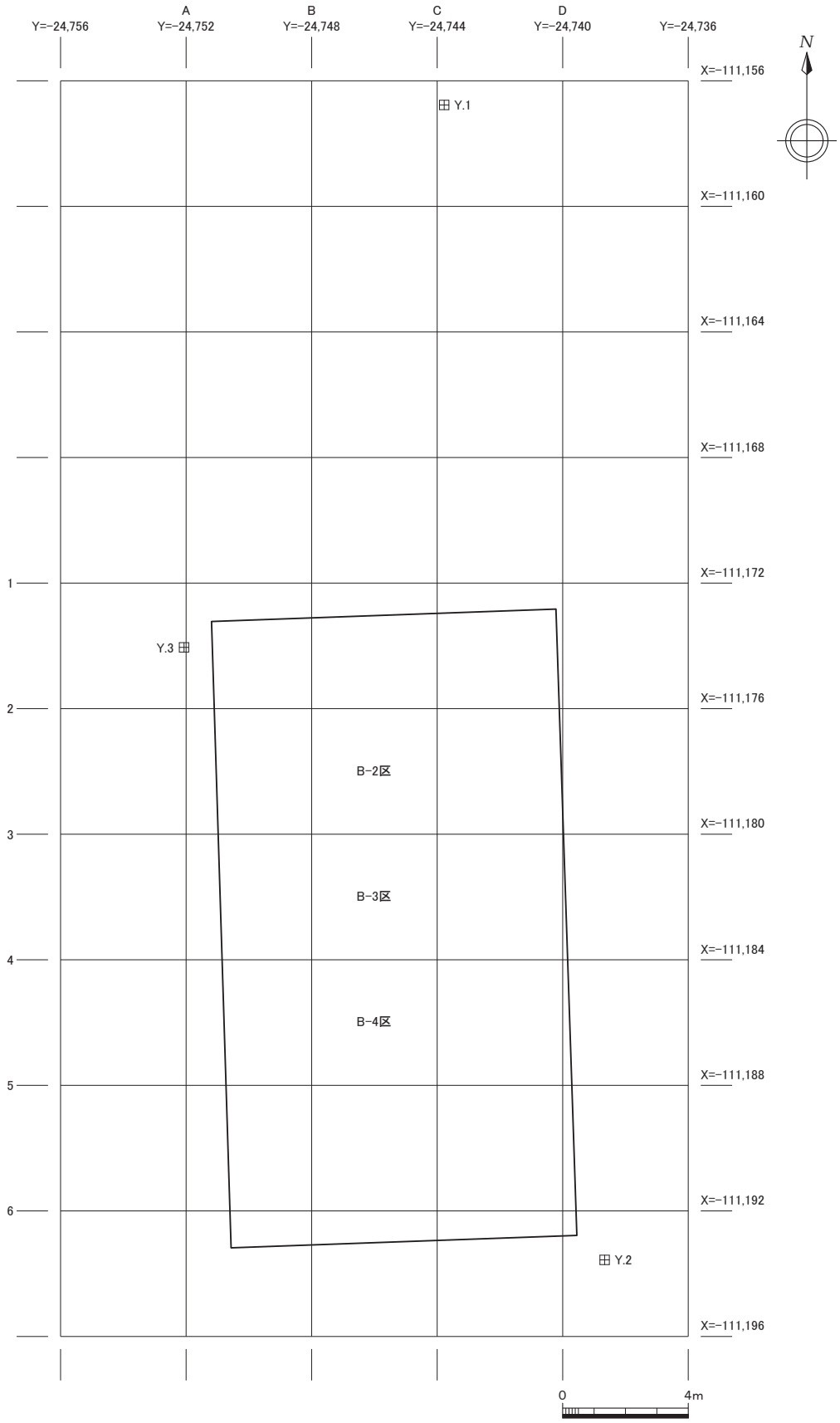


図３　調査区地区割り・基準点配置図（１：200）

1．調査前の状況（北から）

2．重機による盛土掘削作業

3．グリッド杭設置作業

4．発掘作業風景

5．浜中検証委員による現場指導

6．（株）ユタカホールディングス社員の見学風景

7．文化財保護課の最終確認

8．重機による埋戻し作業

図４　発掘調査経過写真

第Ⅱ章　位置と環境

1　周辺の環境（図５・６）

今回の調査地は、京都盆地の中央西寄り、鴨川と桂川に挟まれた場所に位置し、現在、調査地の西約 1.0km に天神川（紙屋川）、約 1.7km に桂川が南流している。平安京の条坊では右京六条三坊一町・二町地内にあたり、四行八門制では、一町内は東四行・北八門、二町内は東四行・北一門に該当する（図 22）。北はかつての五条大路、東は道祖大路、西は宇多小路に囲まれ、調査区内に樋口小路が東西に走ると推定される場所である。またこの地は弥生時代を主体とする集落遺跡・西院遺跡の推定範囲とも重なっている。

平安京右京域は天神川、御室川などの小河川が多く存在し、複数の扇状地帯と自然堤防帯、後背湿地が形成された結果、かつては洪水氾濫が頻発する湿潤な場所であった。平安京以前の遺跡はこうした扇状地上や後背湿地内の微高地上に分布する。西院遺跡は阪急西院駅南側一帯に広がる集落遺跡で、これまでに弥生時代中期の竪穴住居の可能性がある遺物包含層などが検出されている。この西に隣接する西京極遺跡は、東西 650 m、南北 700 mにも及ぶ大規模な集落遺跡で、これまでの調査で縄文時代後期～晩期の土壙、弥生時代中期～後期の溝、竪穴住居、古墳時代中期～後期の竪穴住居、奈良時代の掘立柱建物などが検出されている。特に 2006 年の西院清水町地内での調査では、炉状遺構を伴う弥生時代後期の住居跡から鉄滓や鉄片、ガラス小玉などが出土し、鉄器、玉類を作る工房跡であるとして注目された。また 2018 年に西院月双町で行われた調査では、弥生時代中期に掘削された環濠や溝、土器棺墓なども検出されている。さらに、西院遺跡と西京極遺跡の中間に位置する西院日照町で 2006 年に行われた調査では、弥生時代中期前半～後期後半にかけての方形周溝墓６基が検出され、このうち後期の周溝墓２は一辺 19 mと市内でも最大級の規模を有するものであることが判明した。このことから、一帯には当該地の拠点的集落とされる西京極遺跡に付随する墓域が広がっていた可能性が指摘されている。一方西院遺跡の東方約 400m の京都市立病院構内（壬生高田町）の調査では、北西から南東方向に掘られた幅約２mのＶ字溝や弥生時代後期～古墳時代の土器、直線刃半月形の石庖丁の出土が報告されている。

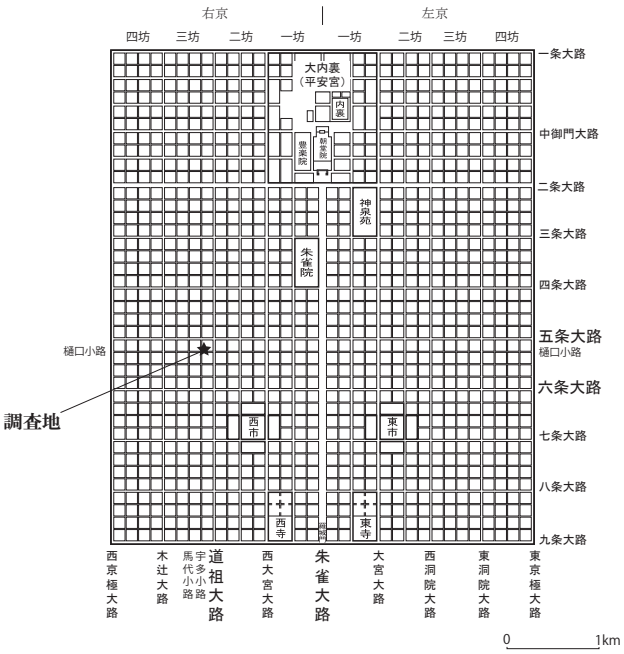


図５　平安京条坊図

奈良時代、西院遺跡周辺は山城国葛野郡に属したが、先の西京極遺跡では８世紀代の総柱建物跡や白鳳期の瓦がカマドに使用された竪穴住居などが見つかっており、一帯は葛野郡における中心集落と考えられ、

近辺には郡役所などの公的施設が存在した可能性も指摘されている。

9世紀末の平安遷都以降、右京域では小河川の氾濫を抑えるため、河川の掘削、分流工事が進められたと考えられており、これまでの調査でも道路側溝の拡幅に留まらず、道祖大路、野寺小路、宇多小路などが人為的に河川化されていることが判明している。11世紀以降、平安京を取り巻く鴨川、桂川流域では、河床の低下により段丘化が進み、氾濫原が減少した結果、都市化や耕地の拡大をもたらしたが、天神川流域での段丘化は進まず、氾濫原は広がったままであったため、右京域は宅地としての活用がなされなくなり、完全に衰退したと考えられている。

今回の調査地における平安時代前期の具体的な土地利用を示す史料は見られないが、北東約750mの地（右京四条二坊）には、淳和天皇（786～840）の邸宅、後院である淳和院（別名「南地院」「西院」）が存在し、この地一帯も西院と呼称されるようになった。また右京七条三坊・四坊には仁明天皇（810～850）の皇子・本康親王が開発したとされる荘園・侍従池領が成立し、後には藤原摂関家において伝承された。平安時代後期になると、周辺には左大臣源俊房領、天台座主良真領なども成立するようになった。さらに平安時代後期から中世にかけて、小泉庄という荘園が存在したことが「拾芥抄」西京図や「東寺観智院文書」の記述から知られる。小泉庄は飛地ながら総計57町と広大なもので、右京四条二坊、五条二坊～四坊、六条二坊、三坊（十三～十六町）、四坊辺りに広く展開し、長く摂関家や門跡寺院の所領として受け継がれた。ちなみに、2021年に行われた西院小学校（右京四条三坊三町跡）の校舎新築に伴う発掘調査の報道発表によれば、小泉庄に関わる建物跡2棟が初めて検出され、11世紀末から13世紀頃までの荘園の管理建物である「荘家」若しくは倉庫の存在が想定されている。

西院では16世紀中頃、洛中唯一の戦国城郭である小泉城が築かれた。その場所は本調査地の北約800 m、現在の西大路四条交差点西側付近（阪急西院駅の西）で、南北約300 m、東西約540 mの規模を測ったと推定されている。築城年代は明らかではないが、天文年間には三好長慶が細川晴元に対抗する為、洛中の抑えとして城を修築し小泉秀清を城将としている。三好長慶没落後、秀清は松永久秀に従ったが、永禄9年（1566）、三好三人衆の攻撃を受け小泉城は落城したと伝わる。また「言継卿記」永禄11年（1568）9月24日の条には「西院小泉島介九条和久壱岐守等城早旦自焼　南方へ加わる」との記載があり、同年前日に入洛した織田信長との一戦を避け、自ら城に火を放って兵を引いたともいわれる。

戦国末期の天正19年（1591）には、天下統一を果たした豊臣秀吉により京都市街を取り囲む長大な土塁・御土居が築造された。しかし西院の地はその外方である「洛外」に置かれたため、一帯の市街化は進まず、静かな農村地帯として近代まで至ることとなる。明治14年（1881）に行われた調査によると、当時の西院村の戸数は270戸、人口1200人だったという。

〈引用・参考文献〉

伊藤淳史「京都盆地の弥生集落」『京都大学構内遺跡調査研究年報』京都大学 1995年

河角龍典「平安京における地形変化と都市的土地利用の変遷」『考古学と自然科学』第42号 2001年

「平安京右京六条二坊 1」『昭和 63 年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1993 年
「平安京右京二条三坊 1」『昭和 60 年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1998 年
「平安京右京三条二坊」『平成 10 年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2000 年
『平安京右京四条三坊十一町跡』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2013 年
『平安京右京五条三坊十四町跡』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2006 年
『平安京右京六条三坊六町跡』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2004 年
『平安京右京六条四坊二町跡・西京極遺跡』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2007 年
『平安京右京六条三坊　平安京跡研究調査報告第 20 輯』（財）古代学協会 2004 年
『平安京右京六条四坊七町跡・西京極遺跡』（株）四門 2019 年
『平安京提要』（財）古代学協会・古代学研究所編　（株）角川書店 1994 年
京都新聞『2021 年 6 月 16 日報道発表資料』（公財）京都市埋蔵文化財研究所 2021 年
『京都府中世城館跡調査報告書 第 3 冊 - 山城編Ⅰ - 』京都府教育委員会 2014 年
小澤嘉三『西院の歴史』西院の歴史編集委員会 1983 年

２　周辺の既往調査（図６・表１）

今回調査を行った平安京右京六条三坊一町跡地内における過去の発掘調査事例は、2021 年１月～３月に文化財サービスが行った西院西寿町 21 番、22 番１外での調査が唯一のものである。場所は今回の調査地の東側隣接地 180 ㎡で、一部砂利敷き舗装された樋口小路路面、道路の南北両側溝、築地の内溝などの遺構が良好な状態で検出されている。このうち南側溝は幅 2.3 m、深さ 0.5 m内外の規模をもち、少なくとも２回に亙り両肩が掘り広げられていることが判明した。また出土遺物の分析から、10 世紀初め頃には道路側溝は泥土により完全に埋没し、その後路面を含め巷所化（耕地化）していったことが推定された（表１・調査１）。

右京六条三坊一町の南東に近接した二町跡では、2003 年マンション建設に伴い計 450 ㎡の発掘調査が行われている（以下特に断りの無いものについては、全て京都市埋蔵文化財研究所による調査）。ここでは、北側に設定したトレンチ（１区）から樋口小路南側溝が検出されており、この溝はある段階で水量調整のため拡幅されていると推定されている。南調査区（２区）では、平安時代前期の宅地関連遺構がみられ、掘立柱建物３棟、柵列２基、井戸１基などが検出されている（調査２）。

四町跡では、これまで６回に亙る発掘調査が行われている。何れも民間会社の社屋や工場建設に伴うものである。1981 年の調査では平安前期から中期の掘立柱建物２棟、柵列１基、溝１本などが検出されている。建物のうち１棟は身舎の４面に庇をもつ南北棟であった（調査３）。1986 年の調査では古墳時代の湿地状落込み、自然流路も検出されたが、遺構の大半は平安時代前期の９世紀代に収まるもので、掘立柱建物 11 棟、門２棟の他、柵、溝、井戸、土壙などが見られる。建物は重複関係をもつものが多く、頻繁に建て替えが行われたと推定されている。また２本の溝で区画された幅３m程の町内区画道路と思われる遺構も検出されている。さらに池跡の存在から、９世紀後半の段階で池をもつ大規模な宅地が広がっていたと考えられている（調査４）。1989 年

の調査では、平安時代前期の掘立柱建物６棟、柵列１基、土壙などが検出されている。掘立柱建物には東西棟で東・西・南に庇をもつものも認められる。また土師器皿が幾重にも重なった土器埋納遺構が検出されている。この土壙内からは完形の須恵器壺Ｍ６個も出土している（調査５）。1993 年、1995 年の調査は、古代文化調査会が実施したものである。平安時代の遺構としては、掘立柱建物、塀のほか、道祖大路の内溝、楊梅小路の路面などが検出されている。尚、道祖大路西築地の宅地内溝からは兵衛･衛門府の次官を指す「佐」銘の墨書土器も出土している（調査６･７）。2019 年度の調査では、９世紀前半の土壙、落込み遺構、９世紀中頃の掘立柱建物１棟、塀２基、溝などの遺構が検出されている。建物は身舎の北と東に庇をもつ南北棟である。東西方向に掘られた溝は、東四行北二門、三門の推定ライン近くに存在するため、門境の溝である可能性が指摘されている（調査８）。

六町跡では、2004 年に民間会社施設建設に伴い調査が行われている。ここでは平安時代前期の掘立柱建物２棟、覆屋を伴う井戸１基、馬代小路東築地の内溝１基、平安時代後期の掘立柱建物１棟、南北流路１本、溝３本などが検出されている。南北流路は、馬代小路路面の位置に重なることから、人為的に掘削された川と考えられている。また井戸内からは斎串や「葛井福万呂」「檜

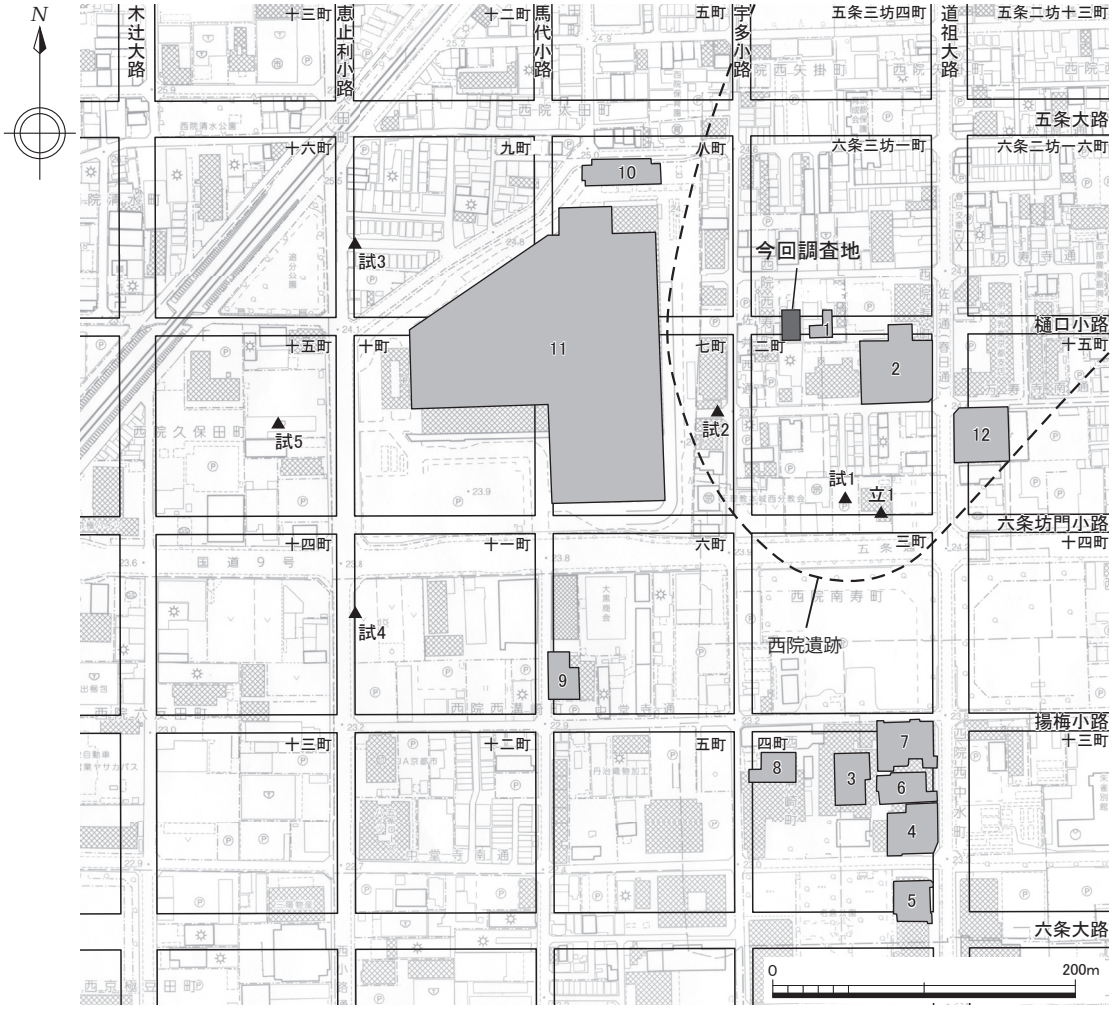


図６　既往調査地位置図（１：5,000）

□阿古□□」と名が墨書された男女の木製人形などが出土しており、井戸での祭祀を物語る遺物として注目された（調査９）。

八町跡では、1990 年、工場建替え工事に伴い北辺部の調査が行われている。ここでは、古墳時代の土壙、平安時代前期～中期の掘立柱建物５棟、柵列などが検出されている。建物は、軸線が真北より西に振れるものから、真北のもの、真北から東に振れるものへと順に新しくなっていると推定されている。調査区東側で検出された南北の柵列は、１町を東西に分割する柵であった可能性も指摘されている（調査 10）。

さらに 2000 年～ 2001 年にかけて、七・八・九・十町で大型商業施設建設に伴う大規模な発掘調査が（財）古代学協会によって行われている。ここでは１町や半町を占める大規模な邸宅跡や条坊関連遺構が多く検出されている。掘立柱建物、池跡、流路、樋口小路や馬代小路に伴う遺構、町内道路などの遺構が見られる。また９世紀代には樋口小路、馬代小路の路面の一部が開削され河川化していることも判明している。このほか「讃岐国苅田郡白米」などと墨書された木簡や人形、獣骨などの祭祀関連遺物が多く出土している。まとまった祭祀遺物の出土例は平安京西市以外あまり例がなく、当地が平安京でも祭祀に関わる重要な場所であることが明らかになった（調査 11）。

この他、今回の調査区に近接した調査事例として、右京六条二坊十五町の調査がある。これは 1993 年に工場建設に伴い実施されたもので、平安時代の道祖大路東側溝や東築地の基礎と考えられる柱穴列、南北方向の河川などが検出されている。河川は道祖大路路面の位置に該当し、平安時代中期には人為的に開削され河川化していたと推定されている（調査 12）。

表１　周辺発掘調査の一覧

番号	条坊（右京）	調査年度	主要な遺構		文　献
			平安時代	その他の時代	
1	六条三坊一町	令和２年度(2021)	平安時代前期：樋口小路路面、樋口小路南北側溝、内溝 平安時代後期：耕作溝	近代：ピット、杭列	『平安京右京六条三坊一町跡・西院遺跡発掘調査報告書』（株）文化財サービス　2021
2	六条三坊二町	平成15年度（2003）	平安時代前期：建物、井戸 土坑、樋口小路南側溝	中世：溝 近世：耕作溝、土坑	『平安京右京六条三坊二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003－7（財）京都市埋蔵文化財研究所　2004年
3	六条三坊四町	昭和56年度（1981）	平安時代前期～中期：建物 柵列、溝		『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1983年
4		昭和61年度（1986）	平安時代：建物、柵、溝 井戸、土坑	古墳時代：流路、落込	『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1989年
5		平成元年度（1989）	平安時代：建物、柵 土坑（土器埋納遺構）	鎌倉時代以降：耕作溝	『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1994年
6		平成５年度（1993）	平安時代：建物、落込 道祖大路内溝	中世以降：耕作溝	『平安京右京六条三坊　ローム株式会社社屋新築に伴う調査』古代文化調査会　1998年
7		平成７年度（1995）	平安時代：建物、塀 楊梅小路路面	中世以降：耕作溝	
8		令和元年度（2019）	平安時代前期：建物、塀、溝 柱穴列、土坑、落込	近世：耕作溝	『平安京右京六条三坊四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2019-8（公財）京都蔵文化財研究所　2020年
9	六条三坊六町	平成16年度（2004）	平安時代前期：建物、井戸 馬代小路内溝 平安時代後期：建物 流路（馬代小路）	中世以降：耕作溝	『平安京右京六条三坊六町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-2（財）京都市埋蔵文化財研究所　2004年
10	六条三坊八町	平成２年度（1990）	平安時代前期～中期：建物、柵列	古墳時代後期：土坑 中世以降：耕作溝	『平成２年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1994年
11	六条三坊七～十町	平成12・13年度（2000～2001）	平安時代：建物、柵列、門 池、樋口小路、馬代小路、流路、木棺墓	縄文時代：流路、土坑 古墳時代：総柱建物、流路 中世以降：建物、耕作溝	『平安京右京六条三坊　平安京跡研究調査報告書第20輯』（財）古代学協会　2004年
12	六条二坊十五町	昭和63年度（1993）	平安時代：道祖大路東側溝 柱穴列（東築地基礎） 流路（道祖大路）、溝	中世：耕作溝	『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1993年
試１	六条三坊二町	平成27年度（2015）	平安時代？：南北溝（東二・三行の区画溝か？）		『京都市内遺跡試掘調査報告　平成27年度』　京都市文化市民局　2016年
試２	六条三坊七町	平成15年度（2003）	平安時代前期：東西溝		『京都市内遺跡立会調査概報　平成15年度』　京都市文化市民局　2004年
試３	六条三坊九町	平成12年度（2000）	平安時代？：南北溝（恵止利小路か？）		『京都市内試掘調査報告　平成12年度』　京都市文化市民局　2001年
試４	六条三坊十一町	令和元年度（2019）	平安時代前期：恵止利小路東側溝		『京都市内遺跡詳細分布調査報告　令和元年度』　京都市文化市民局　2020年
試５	六条三坊十五町	平成28年度（2016）		室町時代：包含層、旧天神川古段階 大正末期～昭和初期：旧天神川新段階	『京都市内遺跡試掘調査報告　平成28年度』　京都市文化市民局　2017年
立１	六条三坊二町	昭和61年度（1986）	平安時代前期：六条坊門小路北側溝		『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和61年度』　京都市文化観光局　1987年

第Ⅲ章　発掘調査の成果

１　基本層序（図７・８）

調査開始前の対象地は、調査の直前まで存在した住宅が撤去された後に地均しされ、平坦な地形を呈していた。標高は調査区北端付近で約 23.79m、南端付近で約 23.81m を測る。大まかに見れば、調査区の基盤（地山）は西半域と東半域では様相が異なり、西半（A- １～５区、B- １～５区付近）での基盤（地山）は硬質な砂礫層（第５層）、東半（C- １～５区付近）での基盤は軟質な粘土、シルト土層（第６・７層）が主体となっていた。これは、かつて西半域が微高地、東半域が低湿地状を呈していたことを示唆し、前者は河川の氾濫堆積層、後者は止水による粘成層や離水後のシルト層と考えられる。第１層から第３層までの土層についてはほぼ全域で認められた。以下基本層序の概要を述べる。

第１層　調査区全域を覆う現代の盛土で、厚さ 0.4 ～ 0.7 ｍを測る。脆弱で粘性の無い褐灰色砂礫土（10YR4/1）を主体とし、近現代のレンガ、コンクリート、陶磁器、ガラス、炭ガラ等を包含する。一部で第５層レベルに達するような掘削坑や建物基礎による撹乱も見られたが、これらも本層に含めている（図７ - １）。

第２層　近現代の耕作土層で、褐色有機シルト土層（10YR3/3）を基本とする（図７- ２）。土質は軟質で若干の粘性をもち、礫は少ない。近現代の陶磁器片を少量包含する。良く残る部分は厚さ 0.2 ｍ前後を測るが、撹乱により認められない箇所も広く存在する。また調査区北東側では、本層の下位にやや色調の異なる耕作土の堆積が認められた（図７a 断面 - ７・８）。上層に比してやや砂分の多い土質で、厚さ 0.1 ｍ内外を測る。

第３層　褐色シルト土層（10YR4/6）を基本とし、厚さ 0.15 ～ 0.3 ｍを測る。良く締まった土質で、粒子が細かく粘性があり礫は少ない。微細なマンガン、褐鉄鉱を多く含む。広く遺構検出面直上に堆積する（図７- ３）。主に古墳時代から中世にかけての遺物を包含するが、その量は多くない。調査区北半域ではグライ化により色調はオリーブ褐色（2.5Y4/3）を呈し、より粘性が強い（図７a 断面 - 10）。

第４層　暗褐色シルト土層（10YR3/3）で、きめ細かく粘性があり良く締まった土質を有する。第３層の下位、一部遺構検出面直上に堆積する土層で、調査区南壁付近に見られる（図７b 断面 - ７）。マンガンや木炭粒、小礫をごく少量含む。厚さ 0.1 ｍ内外を測る。平安時代の遺物を少量包含する。

第５層　第４層直下に堆積する基盤層である。オリーブ褐色（2.5Y4/3）の砂礫土層で、径３～５cm の円礫を主体とする（図７b 断面 -14）。本層上面が調査区西半域の遺構検出面である。硬く締まり、細砂が礫間を埋める。マンガン、褐鉄鉱を多く含む。河川の氾濫堆積層と考えられる。

第６層　第４層直下に堆積する基盤層で、黄灰色粘土層（2.5Y4/1）である。本層上面が調査区南東半域における遺構検出面に相当する（図７- ６）。粘性が強く、良く締まる土質である。礫は殆ど含まず、有機物を僅かに包含する。

第７層　調査区東半域の基盤層で、暗褐色シルト土層（10YR3/3）で、締まりのある土質を有する。小礫や木炭粒を僅かに含む。またマンガン、褐鉄鉱を多量に含む。第６層とともに本層上面が調査区東半域における遺構検出面に相当する（図７-27）。

第８層　調査区南東半域における基盤下層で、黒色シルト土層（2.5Y2/1）である（図７-47）。粘性のある締まりのある土質で、礫を含まない。またマンガンを少量含む。

第９層　第８層と同じく調査区南東半域における基盤下層で、暗灰黄色砂質シルト土層である（図７-46）。礫を含まず、有機物を斑状に含む。またマンガンを少量含む。

第 10 層　第８・９層の下位に堆積する黒褐色砂礫土層（2.5Y3/2）である。径１～２cm の円礫を主体とし、土質は締まりが無く脆弱である。後述する溝 01 は本層まで掘り込まれている（図７-48）。

第 11 層　調査区東半域の基盤下層である。黒褐色シルト土層群（10YR3/1）で、粘性が強く軟質である。厚さ 0.2 ～ 0.3 m を測る。径１～２cm の小礫やマンガンの包含量によってさらに細分することができる（図７-17・19・20）。

第12層　第11層の下位に堆積する黄灰色シルト土層(2.5Y4/1)である。均質できめ細かな土質で、粘性がある。礫が少なく、マンガンを少量含む（図７-24）。

第 13 層　第 12 層の下位に堆積する暗灰黄色砂質土層（2.5Y4/2）である。小円礫を多く含み粘性は少ない土質である（図７-25）。

.

２　検出遺構

今回は、文化財保護課が行った事前の試掘調査の所見に基づき、平安時代を想定した遺構面１面の調査を実施した。先述のとおり、遺構面の基盤となる土層は、調査区の東西で様相が異なり、大まかに見れば東半が軟質な粘土あるいはシルト土（第６・７層）、西半が硬質な砂礫土（第５層）によっていた。その境はほぼグリッド杭 C- ２～ C- ５を結ぶライン付近にあたる。検出した遺構には、樋口小路と推定される路面及び側溝などの条坊遺構、築地の内溝、耕作溝などがある。条坊遺構は、2021 年１月～３月に実施された東隣接地の調査（以下「１次調査」と仮称する）[1] で検出された遺構と繋がるものが多いが、一部様相を異にするものも認められる。

表２　遺構概要表

時　代	遺　構	備　考
平安時代前期	路面 13（樋口小路）、溝 01（樋口小路南側溝） 溝 02・溝 14（樋口小路北側溝）、溝 05 土壙 10	路面 13、溝 01・02・14 は樋口小路 に関する条坊遺構
平安時代後期？	溝 07 ～溝 09、溝 12、溝 16	耕作溝、詳細時期不明
鎌倉時代	溝 04	溝 05 を切る
近　　代	溝 11、埋め甕 06	
不　　明	土壙 15	溝 14 以前の遺構

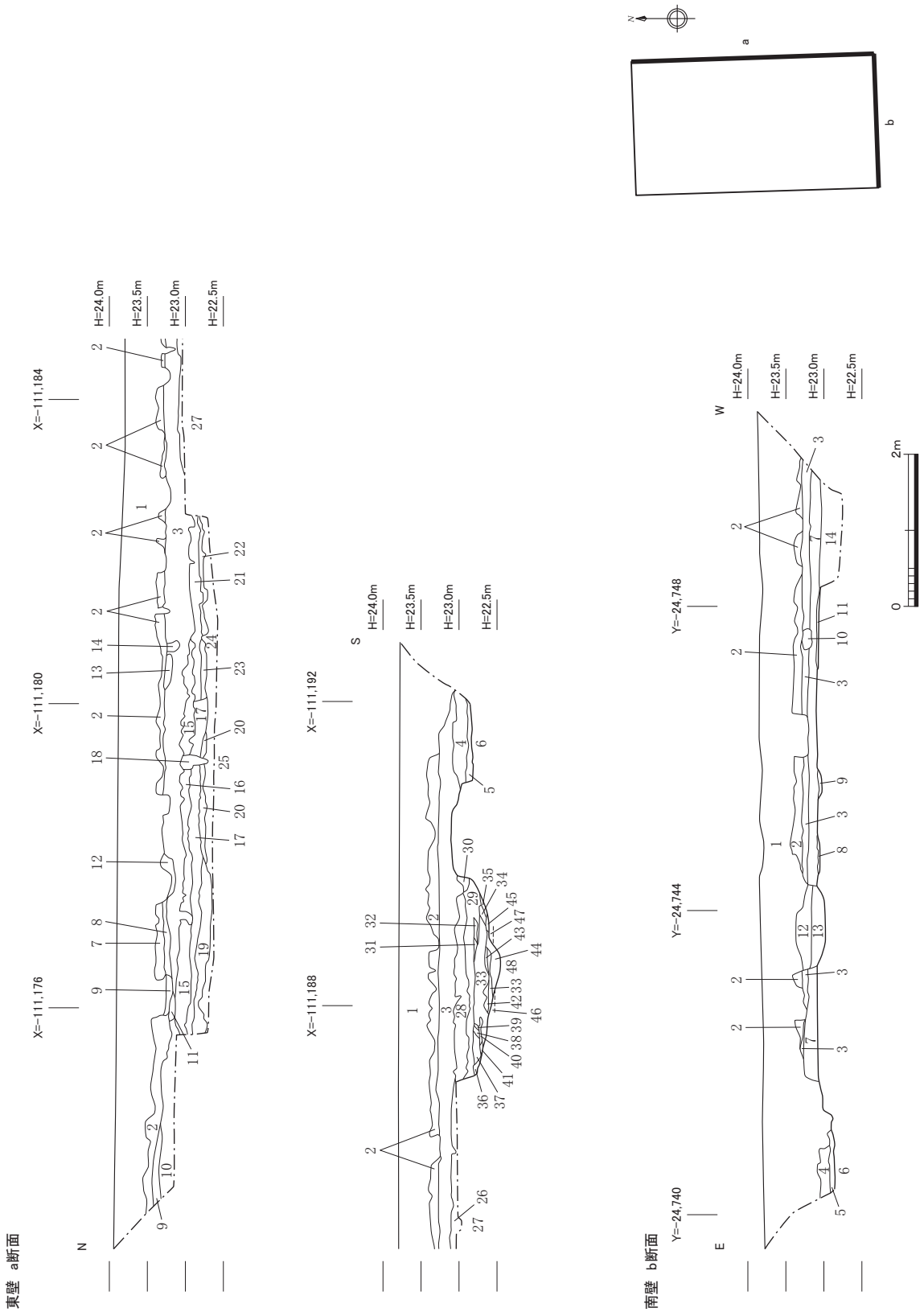


図７　調査区断面図（１：80）

図８　調査区断面層名一覧

東壁　a断面

1　現代盛土　礫多い　レンガ・ガラス等含　［第1層］
2　10YR3/3暗褐色シルト　小礫多い　マンガン含　旧耕作土　［第2層］
3　10YR4/6褐色シルト　礫少ない　鉄・マンガン多い　［第3層］
4　10YR3/3暗褐色シルト　礫少ない　マンガン含　［土壙10埋土上層］
5　10YR2/1黒色粘土　粘性強い　マンガン少量含　［土壙10埋土下層］
6　2.5Y4/1黄灰色粘土層　締りあり　有機物部分的に含　［第6層］
7　2.5Y3/1黒褐色砂質シルト　小礫含　マンガン・木炭含　旧耕作土　［第2層］
8　2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質シルト　礫少ない　マンガン含　旧耕作土　［第2層］
9　2.5Y4/2暗灰黄色砂質土　φ1～2㎝の礫含　マンガン含
10　2.5Y4/3オリーブ褐色シルト　礫少量含　マンガン多量含　［第3層］
11　2.5Y3/2黒褐色シルト　マンガン含
12　2.5Y3/2黒褐色砂質シルト　マンガン・木炭含　［溝11埋土］
13　2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト　小礫含　マンガン・木炭粒少量含
14　2.5Y5/2暗灰黄色砂質土　小礫含　［撹乱］
15　10YR3/1黒褐色シルト　粘性強い　礫少量含　マンガン多量含
16　10YR3/1黒褐色シルト　粘性強い　礫少量含　マンガン多量含
17　10YR3/1黒褐色シルト　粘性強い　小円礫・木炭含　16に類似　［第11層］
18　10YR3/1黒褐色シルト　小礫少量含　マンガン多量含
19　10YR3/1黒褐色シルト　粘性強い　24の粘土をブロック状に含　［第11層］
20　10YR3/1黒褐色シルト　マンガン一部含　19に類似　［第11層］
21　7.5YR3/1黒褐色シルト　粘性強い　有機分多い　マンガン多量含　木炭粒含
22　10YR3/1黒褐色シルト　粘性強い　マンガン少量含　木炭粒含まず　［溝14埋土］
23　10YR3/1黒褐色シルト　粘性強い　マンガン少量含　木炭粒含　［溝02埋土］
24　2.5Y4/1黄灰色粘土　マンガン少量含　［第12層］
25　2.5Y4/2暗灰黄色砂質土　円礫多量含　［第13層］
26　10YR3/3暗褐色有機シルト　小礫・マンガン・木炭含　［路面13形成土］
27　10YR3/3暗褐色シルト　礫・木炭少量含　マンガン多量含　［路面13基盤・第7層］
28　10YR2/2黒褐色シルト　有機分多い　礫少ない　マンガン少量含　木炭粒含　［上層］
29　7.5YR3/1黒褐色シルト　小礫・マンガン少量含　木炭粒多い　［上層］
30　10YR3/1黒褐色シルト　マンガン多い　締りあり　礫含まず
31　10YR3/2黒褐色砂質シルト　粒子細か　有機分多い　木炭少量含
32　10YR3/1黒褐色砂質シルト　砂粒子粗い　マンガン・木炭少量含
33　10YR4/3にぶい黄褐色砂礫　脆弱　有機分少ない　小円礫主体　［下層］
34　10YR3/2黒褐色砂質シルト　有機分多い　［下層］
35　2.5Y2/1黒色有機砂質土　粒子細か　礫含まず
36　2.5Y3/1黒褐色砂質シルト　礫含まず　マンガン含　地山黄色シルト含
37　10YR2/1黒色砂質シルト　有機分多い　礫含まず　マンガン少量含
38　10YR2/1黒色砂質シルト　小礫含
39　10YR3/2黒褐色砂礫シルト　締りあり
40　10YR3/1黒褐色砂質土　有機分含
41　10YR3/1黒褐色砂質土　有機分含　地山黄色シルト含　［下層］
42　10YR1.7/1黒色有機粘土　均質
43　10YR3/2黒褐色砂礫　シルト土混じり　粘性あり　有機分含
44　10YR4/6褐色砂質土　脆弱　きめ細か　有機分少量含　［下層］
45　2.5Y4/2暗灰黄色シルト　均質　混入物なし　［溝01埋土］
46　2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト　有機物含　礫含まず　マンガン少量含　［第9層］
47　2.5Y2/1黒色シルト　粘性あり　礫含まず　マンガン少量含　［第8層］
48　2.5Y3/2黒褐色砂礫層　脆い　小円礫主体　［第10層］

南壁　b断面

1　現代盛土　礫多い　レンガ・ガラス等含　［第1層］
2　10YR3/3暗褐色シルト　小礫多い　マンガン含　旧耕作土　［第2層］
3　10YR4/6褐色シルト　礫少ない　鉄・マンガン多い　［第3層］
4　10YR3/3暗褐色シルト　礫殆ど含まず　マンガン含　［土壙10埋土上層］
5　10YR2/1黒色粘土　粘性強い　マンガン少量含　［土壙10埋土下層］
6　2.5Y4/1黄灰色粘土層　締りあり　有機物部分的に含　［第6層］
7　10YR3/3暗褐色シルト　礫殆ど含まず　マンガン含　［第4層］
8　10YR3/4暗褐色シルト　マンガン含　木炭粒少量含　［溝16埋土］
9　10YR5/2灰黄褐色砂質シルト　粘性弱い　マンガン含　［溝09埋土］
10　撹乱層
11　10YR4/3にぶい黄褐色シルト　粘性弱い　マンガン含　［溝08埋土］
12　10YR4/2灰黄褐色シルト　木炭・陶器・レンガ片含
13　礫集積層　拳大～人頭大の礫・レンガ片・ガラス片含　［撹乱埋土］
14　2.5Y4/3オリーブ褐色砂礫シルト　粘性弱い　小円礫・マンガン多量含　［第5層］

条坊及びその関連遺構

調査区は平安京右京六条三坊一町及び二町の一部に相当し、四行八門制による地割りでは一町側が東四行・北八門、二町側は東四行・北一門となる。条坊遺構には、樋口小路に関連する遺構として南北両側溝と路面がある。また築地遺構は検出できなかったが、その内溝と思われる遺構を検出している。

溝 01（樋口小路南側溝）（図９・10・11・12）

溝 01 は樋口小路南側溝と考えられる東西溝で、調査区の南半、A- ４・５区、B- ４・５区、C- ４・５区より検出したものである。遺構の西半は第５層、東半は第６層を掘削している。幅 2.2 ～ 2.6 m、検出全長は約 9.4 m を測る。溝幅は『延喜式』「左右京職京程条」（以下「延喜式」という）の規定・三尺（約 0.9 m）に比してかなり広いが[(2)]、「1 次調査」樋口小路南側溝（溝 01）の幅 2.2 ～ 2.4 m とほぼ同規模を示す。溝の南北両肩ラインは若干の凹凸を伴うものの平行を保ち、軸方向は東西座標軸とほぼ一致している。検出面からの深さは 0.4 ～ 0.5 m を測る。断面形は浅い U 字状を呈し、南側（犬行側）の立ち上がりは北側に比べ若干急なものとなっている。溝底のレベルは場所により若干の差があるものの、東半で標高 22.42 m、西半で 22.58 m前後を測り、「1 次調査」溝 01 の溝底平均レベル 22.68 m よりも僅かではあるが低い傾向にある。また溝底には一段深く掘られた部分が複数認められ、溝の作出にあたっては土壙を連続して掘り連ねるような工法が採られた可能性を示唆する。埋土は大きく上層・下層に分けることができ、下層は脆弱な 10YR4/3 あるいは 10YR4/4 などの褐色の礫・粗砂層、上層は 7.5YR3/1 あるいは 7.5Y2/1 などの黒（褐）色のシルト質泥砂土層である。礫・粗砂層である下層を詳細に見れば、直径 0.5 ～ 2 cm の円礫を主体とする砂礫層が縞状に水平堆積し、有機分は極めて少ないことが判る。これは、当初溝の水流は速く、流量も多く、十分な排水機能を持っていたことを物語るものである。一方、上層のシルト質泥砂土層についても分層が可能で、これらは本溝が排水機能を低下させ、滞水が恒常化する中で徐々に泥土により埋没していった過程を示すものと言える。さらに、何れの埋土断面図を見ても明らかなように、溝の南北両肩（立ち上がり部）付近には最下層である砂礫層を切るような黒褐色泥砂土の堆積が認められる（図７-37、図７- ４・５など）。これは本溝が路面側（北）、犬行側（南）双方に掘り広げられたことを示しており、犬行側への拡幅がやや大きかったようにも見受けられる。この拡幅の痕跡は、溝の東端埋土断面で明瞭に認められ、溝底がテラス状に掘り広げられていることが確認できる（図７の溝 01 断面）。こうした溝 01 の大規模な拡幅や埋土の基本層序は「1 次調査」でも確認された事象である。

本遺構からの出土遺物には土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、瓦などがあり、その量は今回の調査では最も多い。埋土下層と上層では遺物の傾向に若干の時期差が看取されることから、本溝は遅くとも 9 世紀初め頃までには掘削され、10 世紀前半までには完全に埋没していると推定される。また後述するように、本遺構埋土上面レベルから後世の耕作溝と思われる溝のプランを検出している。

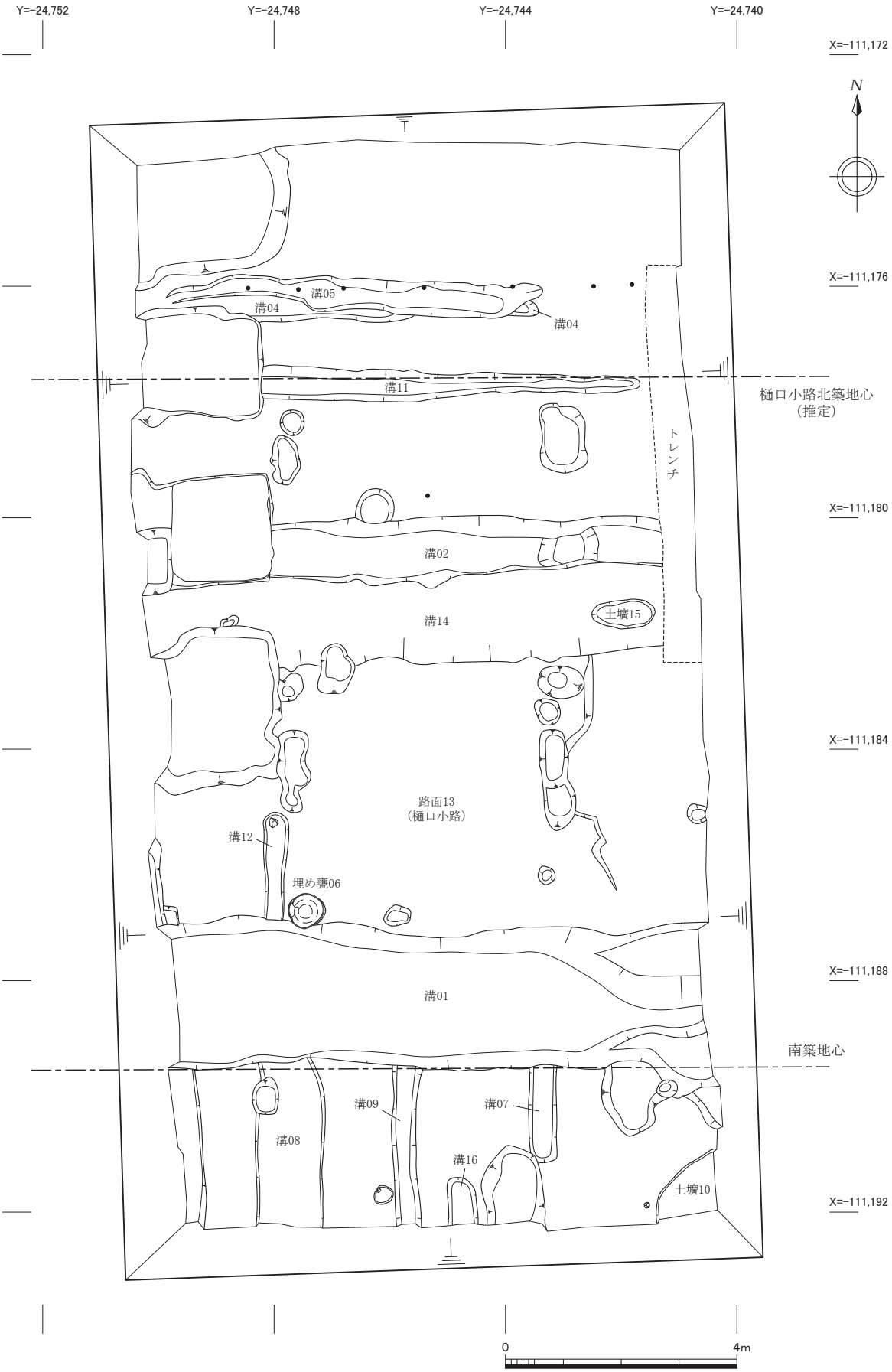
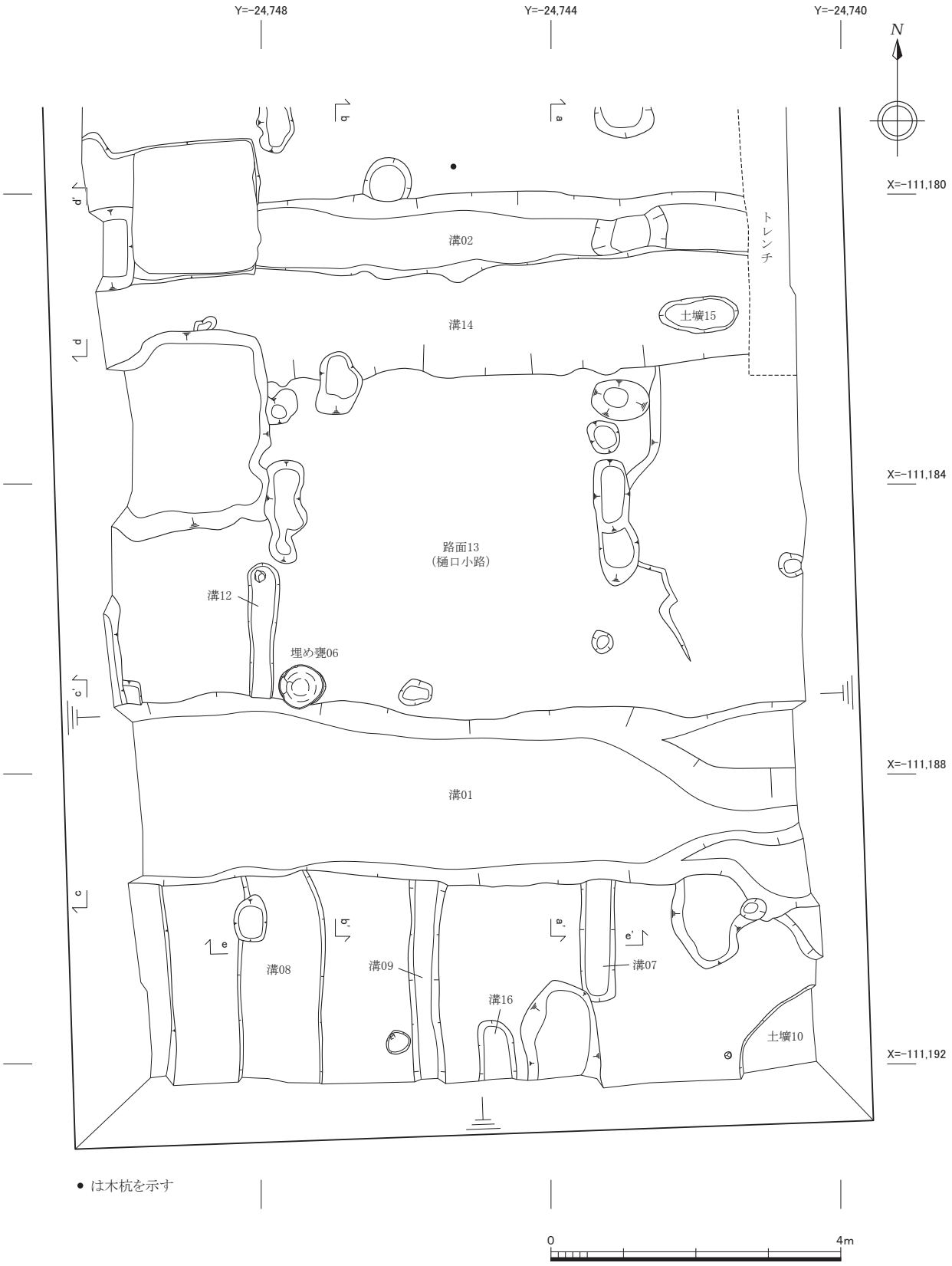


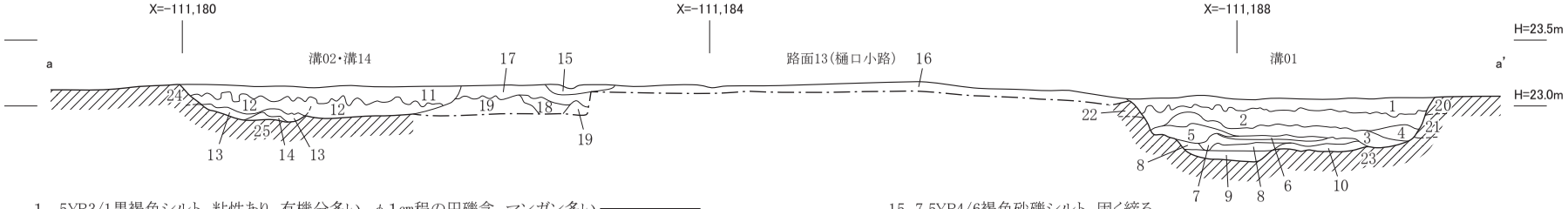
図９　調査区平面図（１：100）



※図中a-a'、b-b'は図11、図中c-c'、d-d'は図12、図中e-e'は図16と対応

図10　溝01・溝02・溝14・路面13ほか平面図（1：80）

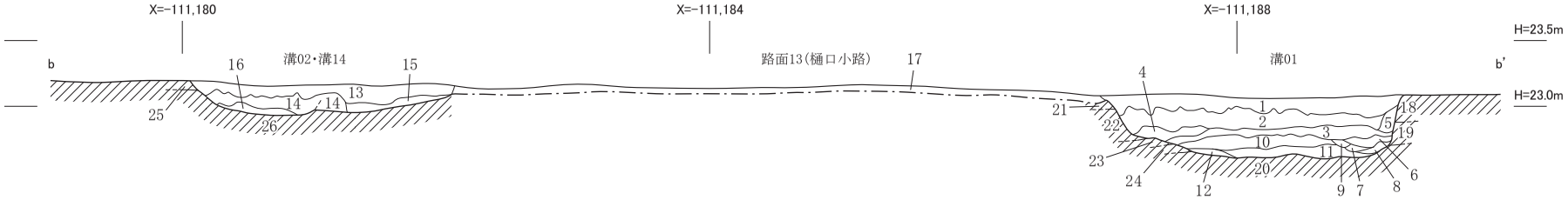
路面13・溝01・溝02・溝14東セクション



1　5YR3/1黒褐色シルト　粘性あり　有機分多い　φ1cm程の円礫含　マンガン多い
2　7.5YR3/1黒褐色シルト　粘性強い　締りあり　きめ細か　φ3～5cmの円礫・木炭含
3　7.5YR2/1黒色シルト　粘性強い　有機分多い　小礫含　マンガン・木炭含まず
4　5YR1.7/1黒色シルト　粘性強い　地山の円礫混入　木炭含まず
5　7.5YR2/1黒色砂混シルト　粘性ややあり　小礫・マンガン少量含　木炭含
6　7.5YR4/2灰褐色砂礫　脆弱　砂粒主体　φ2cmの礫含
7　7.5YR4/3褐色砂礫　脆弱　砂主体
8　7.5YR4/4褐色砂礫　脆弱　小礫多い
9　2.5Y6/3にぶい黄色砂　脆弱　礫含まず
10　2.5Y4/2暗灰黄色砂礫　脆弱　有機分少量含　φ1cm以下の礫含
［溝01埋土］
11　10YR3/2黒褐色シルト　粘性あり　固く締る　φ1cm以下の小礫含　マンガン含
12　7.5YR3/1黒褐色シルト　粘性強い　きめ細か　礫含まず　マンガン少ない　木炭含
［溝14埋土］
13　10YR3/1黒褐色有機シルト　粘性あり　φ1cm以下の礫少量含
14　10YR4/1褐灰色砂礫　固く締る　φ1cm以下の円礫多い　マンガン少量含　地山土の再堆積
［溝02埋土］

15　7.5YR4/6褐色砂礫シルト　固く締る
16　10YR4/6褐色有機シルト　有機分含　φ2cmの礫・マンガン含　［路面13］
17　7.5YR3/3暗褐色シルト　粘性あり　マンガン集中
18　10YR3/2黒褐色シルト　粘性強い　φ2cmの礫少量含
19　10YR2/1黒色シルト　粘性強い　φ1cm以下の礫含
20　10YR3/1黒褐色シルト　よく締る　φ2cm以下の円礫含　マンガン多い
21　7.5Y3/1オリーブ黒色シルト　粘性強い　φ3cm以下の礫少量含
22　2.5Y3/2黒褐色シルト　よく締る　φ2cmの円礫多い　木炭少量含　マンガン多い
23　2.5Y4/3オリーブ褐色砂礫　固く締る　φ4cm以下の礫主体　鉄・マンガン多い
24　5YR3/1黒褐色砂礫シルト　粘性あり　固く締る　φ1cm以下の礫含
25　5Y4/2灰オリーブ色砂礫　固く締る　円礫主体　鉄・マンガン含
［地山］

路面13・溝01・溝02・溝14西セクション



1　10YR3/2黒褐色シルト　粘性あり　よく締る　有機分多い　φ1cm前後の角礫多量含　鉄・マンガン多い
2　10YR3/1黒褐色シルト　粘性あり　よく締る　φ2～3cmの礫含
3　7.5Y2/1黒色砂質シルト　粘性あり　有機分多い　鉄・マンガン少量含
4　7.5YR3/1黒褐色シルト　粘性あり　締りあり　φ2cmの円礫少量含
5　10YR1.7/1黒色砂礫　若干粘性あり　固く締る　φ1cmの円礫含　マンガン少量含　地山土の再堆積
6　2.5Y2/1黒色砂質シルト　粘性強い　礫含まず　マンガン少量含
7　10YR3/1黒褐色砂質土　締りなし　きめ細か
8　10YR3/1黒褐色有機砂質シルト　有機分多い　きめ細か　マンガン含まず
9　10YR2/2黒褐色砂質シルト　砂分多い　粘性あり　マンガン含まず
10　10YR4/4褐色砂礫　脆弱　有機分少ない　φ1cm以下の礫含　鉄・マンガン含
11　10YR3/3暗褐色砂礫　脆弱　有機分少ない　φ1～2cmの礫含
12　10YR2/1黒色粘土　粘性あり　有機分多い　礫少ない
［溝01埋土］
13　7.5YR4/4褐色シルト　粘性あり　よく締る　有機分あり　礫含まず　マンガン多い
14　7.5YR2/2黒褐色シルト　粘性あり　よく締る　有機分あり　φ15cmの円礫含　マンガン少ない　木炭含
15　10Y3/1オリーブ黒色シルト　粘性あり　礫少ない
［溝14埋土］

16　10YR3/2黒褐色砂質シルト　粘性あり　有機分あり　φ2cmの礫含　［溝02埋土］
17　10YR4/3にぶい黄褐色シルト　粘性あり　締りあり　有機物・小礫含　マンガン少量含　［路面13］
18　10YR2/2黒褐色砂礫　粘性あり　マンガン多量含
19　10YR4/2灰黄褐色細砂礫　脆弱　粘性あり
20　2.5Y4/4オリーブ褐色砂礫　粘性強い　固く締る　φ5cm以下の円礫多量含
21　10YR2/2黒褐色シルト　よく締る　φ1cmの円礫含　マンガン多い
22　7.5YR2/1黒色有機シルト　粘性強い　よく締る　マンガン少ない
23　7.5YR4/1褐灰色粘土　砂質分含　粘性あり　マンガン少量含
24　10YR1.7/1黒色粘土　砂粒含　粘性あり　よく締る　マンガン少量含
25　10YR6/1褐灰色シルト
26　10YR4/3にぶい黄褐色砂礫　固く締る　φ3cm以下の円礫主体
［地山］

0　2m

図11　溝01・溝02・溝14・路面13断面図（1：50）

溝 02・溝 14（樋口小路北側溝）（図 12・13・14）

溝 02・溝 14 は樋口小路北側溝と考えられる東西溝で、A- ３区、B- ３区、C- ３区より検出したものである。両者は並行しており、切り合い関係を有するが、埋土断面の観察から樋口小路造成当初の北側溝が溝 02、これを路面側（南側）に拡幅したものが溝 14 と判断した。

両遺構の軸方向は東西座標軸とほぼ一致している。ともに西半は硬い砂礫層（第５層）、東半は軟質の湿地性堆積土である黒色シルト層（第６・７層など）を掘削しており、こうした地山の特性から、特に両遺構東端のプランは極めて不鮮明なものとなっている。

溝 02 は撹乱によって一部滅失しており、検出全長約９m、残存幅 0.7 ～ 1.1 mを測る。南肩を溝 14 によって大きく切られるが、溝底に残る僅かな立ち上がりの角度から推定すれば、当初の幅は 1.1 m前後の規模を有していたと思われる。これは「延喜式」に記された幅三尺（約 0.9 m）に比較的近い値を示していることが判る。この復元した溝 02 の南肩ラインは、溝 01 の北肩から樋口小路路面（路面 13）を挟んで約６m北の位置にあたる。断面はＵ字形を呈し、検出面からの深さは 0.3 m前後と浅い。溝底レベルは標高 22.9 ～ 23.0 mで、溝 01 の溝底に比して 0.3 m前後高い位置にある。本遺構に帰属するオリジナルな埋土は溝底に僅かに残るのみで、10YR3/2 の黒褐色砂質シルト土を基本とし、溝 01 下層で見られた脆弱な砂礫土の堆積は認められなかった。こうした埋土の状況や溝底のレベルは、本溝が十分な排水機能を有していなかったことを示し、滞水が常態化していたことを示唆している。よって少なくとも調査地近辺における樋口小路においては、造営当初より溝 01 が殆ど全ての排水機能を担っていたことが判り、溝 02 は条坊の区画程度の機能しか有さなかったものと推定される。こうした溝 02 の規模・形状は「1 次調査」で検出された北側溝（溝 02）の属性と一致している。溝 02 から出土した遺物には土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器などがあり、ほぼ９世紀前半代に収まるものと考えられる。

溝 14 は路面 13 の断ち割りによってその存在が確認できた遺構である。溝 02 の南肩から路面側に向かって更に幅 1.2 ～ 1.5 mに亙り浅く掘り広げたもので、南肩の検出全長は約 6.7 mを測る。

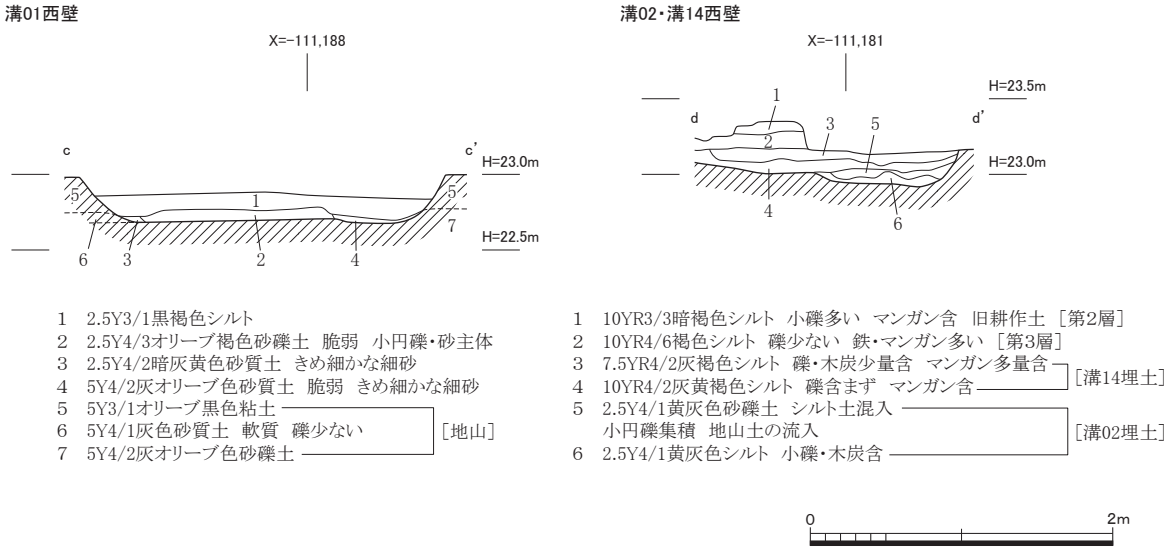
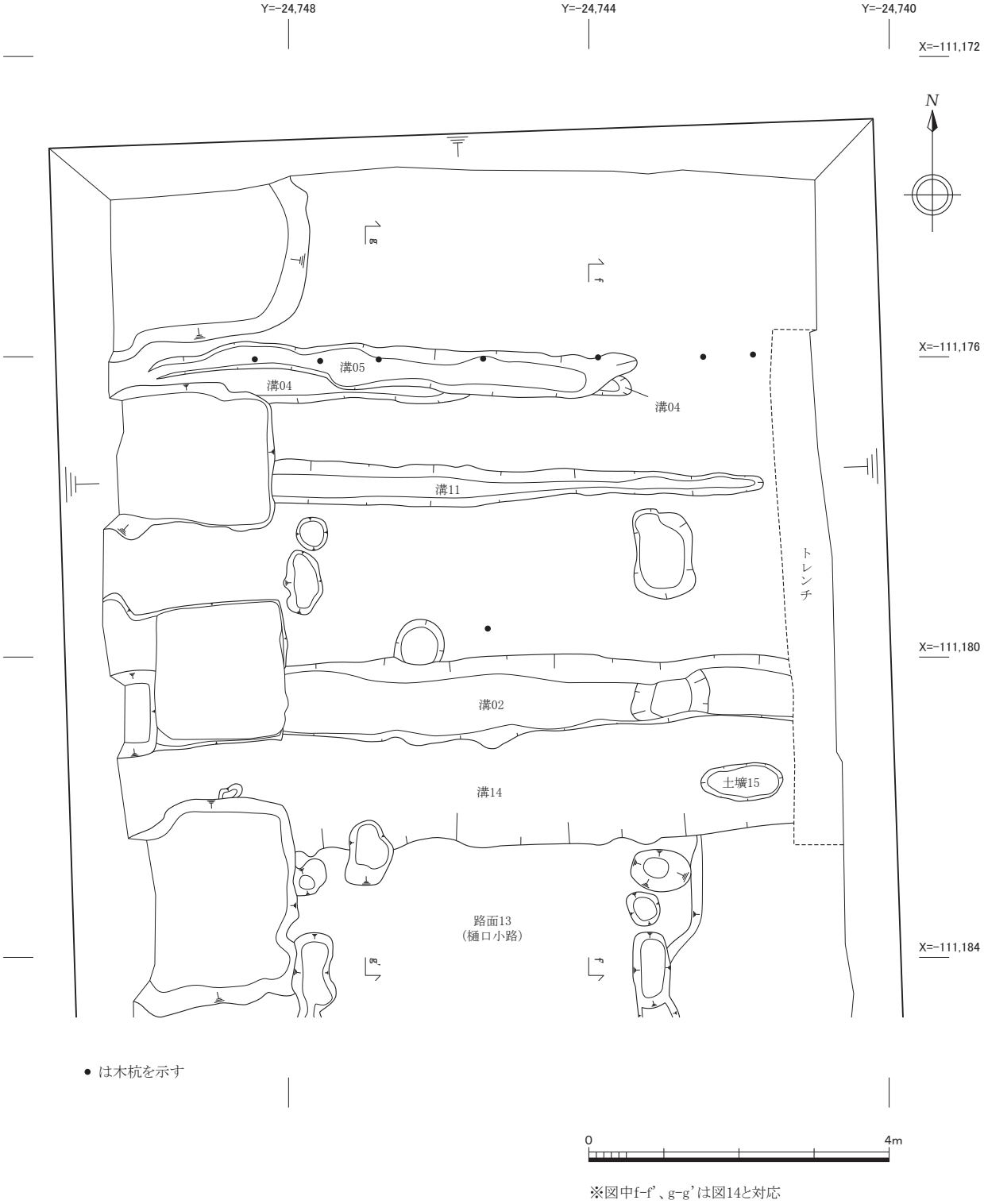


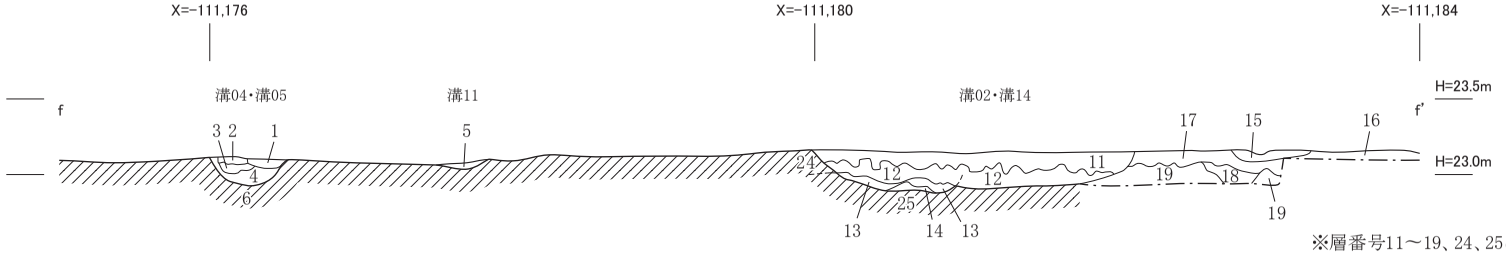
図12　溝01・溝02・溝14断面図（１：50）



※図中f-f'、g-g'は図14と対応

図13　溝02・溝04・溝05・溝11・溝14・土壙15ほか平面図（1：80）

溝02・溝04・溝05・溝11・溝14東セクション

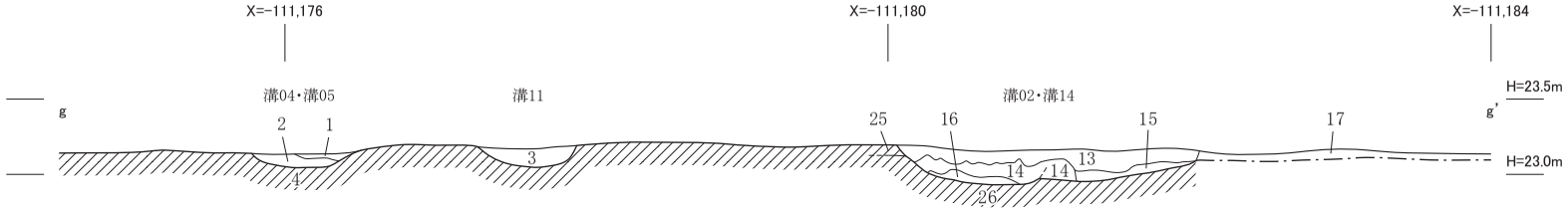


※層番号11～19、24、25は図11と対応

1　10YR4/2灰黄褐色砂質シルト　軟質　上面近くに小円礫集積［溝04埋土］
2　10YR6/2灰黄褐色シルト　よく締る　礫・マンガン含まず
3　10YR2/1黒色シルト　粘性あり　よく締る　有機分多い　礫含まず
4　10YR3/1黒褐色シルト　粘性強い　よく締る　φ1cm前後の小礫僅かに含　マンガン含まず
［溝05埋土］
5　10YR4/1褐灰色砂質土　φ2cmの礫少量含　木炭粒多量含［溝11埋土］
6　2.5Y2/1黒色粘土　粘性強い　きめ細か　有機分含　マンガン少量含［地山］

11　10YR3/2黒褐色シルト　粘性あり　固く締る　φ1cm以下の小礫含　マンガン含
12　7.5YR3/1黒褐色シルト　粘性強い　きめ細か　礫含まず　マンガン少ない　木炭含
［溝14埋土］
13　10YR3/1黒褐色有機シルト　粘性あり　φ1cm以下の礫少量含
14　10YR4/1褐灰色砂礫　固く締る　φ1cm以下の円礫多い　マンガン少量含　地山土の再堆積
［溝02埋土］
15　7.5YR4/6褐色砂礫シルト　固く締る
16　10YR4/6褐色有機シルト　有機分含　φ2cmの礫・マンガン含［路面13］
17　7.5YR3/3暗褐色シルト　粘性あり　マンガン集中
18　10YR3/2黒褐色シルト　粘性強い　φ2cmの礫少量含
19　10YR2/1黒色シルト　粘性強い　φ1cm以下の礫含
24　5YR3/1黒褐色砂礫シルト　粘性あり　固く締る　φ1cm以下の礫含
25　5Y4/2灰オリーブ色砂礫　固く締る　円礫主体　鉄・マンガン含
［地山］

溝02・溝04・溝05・溝11・溝14西セクション



※層番号13～17、25、26は図11と対応

1　10YR5/1褐灰色砂礫　砂層主体　φ3cm以下の礫多量含　マンガン含［溝04埋土］
2　7.5YR4/2灰褐色シルト　粘性あり　締りあり　礫少ない［溝05埋土］
3　10YR4/1褐灰色砂質土　φ2cmの礫少量含　木炭粒多量含［溝11埋土］
4　2.5Y3/2黒褐色砂礫　固く締る　マンガン含　φ5cm以下の円礫主体［地山］

13　7.5YR4/4褐色シルト　粘性あり　よく締る　有機分あり　礫含まず　マンガン多い
14　7.5YR2/2黒褐色シルト　粘性あり　よく締る　有機分あり　φ15cmの円礫含　マンガン少ない　木炭含
15　10Y3/1オリーブ黒色シルト　粘性あり　礫少ない
［溝14埋土］
16　10YR3/2黒褐色砂質シルト　粘性あり　有機分あり　φ2cmの礫含［溝02埋土］
17　10YR4/3にぶい黄褐色シルト　粘性あり　締りあり　有機物・小礫含　マンガン少量含［路面13］
25　10YR6/1褐灰色シルト
26　10YR4/3にぶい黄褐色砂礫　固く締る　φ3cm以下の円礫主体［地山］

0　2m

図14　溝02・溝04・溝05・溝11・溝14断面図（1：50）

埋土断面の観察から、溝 02 が殆ど埋没した後に行われた施工と考えられる。掘削は溝 02 に向かって徐々に深くなるもので、遺構の北肩は溝 02 のそれと共用するようである。断面は皿状を呈し、検出面からの深さは約 0.2 m と溝 02 に比して更に浅いものとなっている。埋土は 7.5YR3/1 あるいは 7.5YR2/2 黒褐色シルト土を基本とし、木炭粒を含むものであった。このような当初の北側溝を掘り広げて幅を倍以上にし、この結果道幅を狭めるといった行為は「1 次調査」では確認できなかった事象である。溝 14 の出土遺物には土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器等があり、ほぼ９世紀代に比定できるものであるが、一部の灰釉陶器の特徴から、９世紀末頃に掘削された遺構と推定される。

路面 13（樋口小路道路面）（図 10・11）

路面 13 は樋口小路道路面の遺構である。南側溝である溝 01、北側溝である溝 02・溝 14 に挟まれた範囲で、検出全長は約 9.5 m、最終的な形態では幅 4.5 ～ 4.9 m を測る。路面幅は、「延喜式」に規定された二丈三尺（約 6.9 m）よりもかなり狭いものとなっているが、これは前述のとおり、南北両側溝の路面側への拡幅が道幅を削ったためである。ただし、溝 01 の拡幅前の心が遺構埋土下層の中心付近にあり、かつ当初の溝幅が規定どおり三尺であったと仮定した場合でも、初期の北側溝の姿を留める溝 02 の位置から見て、路面の幅は 6.9 m よりも 0.4 ～ 0.5 m 程狭くなると思われる。よってこの路面は最初から「延喜式」の記述よりも若干狭く造られていた可能性が高いと思われる。このことは「1 次調査」で検出された樋口小路（路面 27）においても同様に指摘されている。

後述するように、南北両側溝の出土遺物を詳細に分析すると、溝 01 は９世紀後半代までに南北に拡幅され、10 世紀前半には完全に埋没してしまっていると考えられる。その埋没の過程で溝 02 の拡幅工事（溝 14）が行われたと推定される。よって路面 13 の道幅は、当初約 6.5 m であったものが、溝 01 拡幅により約６m となり、最終的には約 4.6 m にまで狭まったという少なくとも２段階の変遷が想定できる。

路面の標高は 23.07 ～ 23.17 m で、これは「1 次調査」路面 27 の 23.1 m 前後、あるいは西方の六条三坊七町～十町で行われた調査[3]で検出された樋口小路路面（22.69 ～ 23.12 m）に近いレベル数値となっている。路面の一部では、後世の巷所化を示す耕作溝や現代の撹乱坑が見られたものの、大きく削平された形跡は認められず、溝 01 や溝 02 の遺構検出面であるこの面が当時の路面レベルであったと判断される。さらにこれを断ち割ったところ、本路面は地山上に堆積した厚さ３～５cm の褐色シルト土（10YR4/6）により構成されていることを確認した。本層は遺物を少量含み、断面観察では路面中央部分が僅かに高く、両側溝に向かって徐々に下降するように堆積していることが判明した。また本層からは溝 01 埋土上層出土遺物と接合する個体が出土していることから（図 19 - 25、図 20 - 48）、側溝の氾濫や溢水等による自然堆積を成因とした可能性が高く、路面の最終的な形態を表するものと思われる。尚、今回は「1 次調査」の路面 27 で確認されたような礫敷きの舗装痕は検出されなかった。

路面上や覆土からは土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦質土器等が出土しており、８～９世紀代のものが主体を占める。

溝 04・溝 05（図 13・14）

溝 04・溝 05 は調査区の北側、A- ２区、B- ２区、C- ２区より検出した東西溝で、溝 02 の北に約 3.5 mの間隔を置いて並行する。両者には明確な新旧の切り合い関係があり、溝 05 が先に掘られ、これが完全に埋没した後、なぞるように溝 04 が掘削されている。

溝 05 は幅 0.6 m前後、検出全長約 6.5 mを測る。主軸は座標東西軸にほぼ一致し、溝の西側は調査区外へさらに延びる様相を呈する。また東端は調査区東壁の約 2.3 m手前、C- ２区グリッド杭近くで途切れている。検出面からの深さは 0.08 ～ 0.17 mを測り、断面は浅い U 字形を呈する。溝底レベルは 22.93 ～ 23.14 m程である。埋土は 10YR3/1 黒褐色シルト土あるいは 7.5YR4/2 灰褐色シルト土を主体とし、共に粘性が強く締まった土質である。

溝 04 は溝 05 の南肩の一部を切って掘削された東西溝で、検出全長約 6.5 m、幅は 0.3 ～ 0.5 mを測る。やはり東端は C- ２区グリッド杭付近で収束している。一部は溝 05 の埋土中のみにプランを有していることから、溝05が完全に埋没した後に掘削されたものであることは明らかである。断面は浅いU字形を呈し、検出面からの深さは 0.07m 前後とごく浅いものである。溝底レベルは 23.04 ～ 23.19 mで、溝 05 よりも 0.1 m程浅く掘られている。埋土は有機分の多い 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト土を主体とし、粘性の少ない土質である。

溝 05 からは、土師器、須恵器、緑釉陶器、黒色土器など平安時代の遺物が出土しているが、いずれも９世紀代に納まるものと考えられ、他の条坊遺構と同時期に存在した遺構と考えられる。従ってその位置関係から、樋口小路の北側の宅地に付随した築地の内溝（雨落ち溝）であったと推定される。一方溝 04 からの出土遺物には、13 世紀代のものが多く含まれ、溝 05 を再掘削したものでありながら明らかに時代を異にしている。

築地の内溝と思われる遺構は、「1 次調査」に於いても溝 03 及びこれを掘り広げた溝 04 として検出されているが、両溝を合わせた幅が 2.5 m前後と大型であるのに対し、今回の溝 05 は幅 0.6 m前後と、規模において大きな相違が認められる。

この他、溝 05 の軸に合わせて直線的に打込まれた７本の木杭が検出されたが、杭の質感や残存状態から見て極めて新しいものであり、近現代の耕作に伴うものと判断した。同様の木杭列は「1 次調査」においても検出されており、一連のものと思われる。

土　壙

土壙 10（図７、図 10）

土壙 10 は、調査区南東隅の C- ５区より検出した遺構である。遺構の大半は調査区域外に存在するため全容は不明であるが、検出した一部の掘り方の形状と東西、南北の長さ約 1.1 mから、恐らく直径２m以上の円形プランをもつものと推定される。埋土は上下２層に分けることができ、

上層は木炭を含む10YR3/3暗褐色シルト土、下層が有機物を多く含む10YR2/1黒色粘土である。遺物は埋土上層から出土しており、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器が見られる。これらの遺物の特徴から９世紀後半頃の遺構と考えられる。

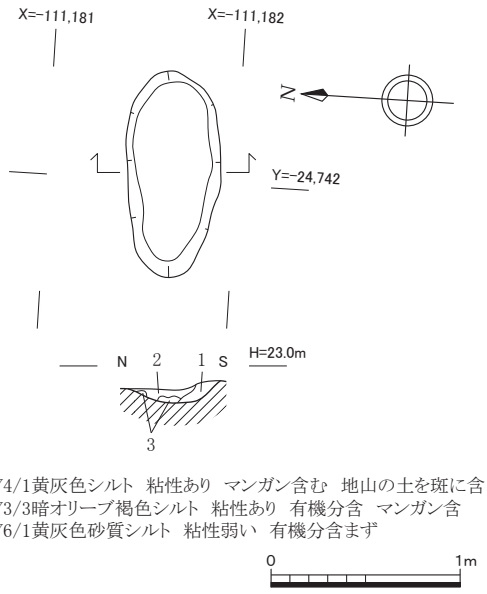


図15　土壙15実測図（１：40）

土壙15（図15）

土壙15は、調査区東寄りの中央付近、C-３区から検出した遺構で、溝14の埋土を除去した際に確認した。東西方向に長い楕円形プランをもち、最大長は東西1.1ｍ、南北0.6ｍを計測する。横断面形はＵ字状を呈し、検出面からの深さは0.1ｍと浅い。埋土は2.5Y4/1黄灰色シルト土、2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト土を基本とする。埋土からは土師器の小片が１点出土したのみで、詳細な時期は不明であるが、溝14に先行する遺構と考えられる。

耕作溝

溝07～溝09・溝12・溝16（図10、図16）

路面13と溝01南側の犬行部から南北方向に掘削された小溝を検出し、溝07～溝09・溝12・溝16と命名した。全て条坊遺構検出面と同一面から検出したものである。溝07・溝09・溝12・溝16の幅は0.3～0.4ｍ､溝08の幅は1.1ｍ前後である。検出面からの深さは何れも0.05ｍ～0.07ｍとごく浅く、断面形はＵ字形を呈し、0.5～２ｍ程の間隔を置いて掘られていた。調査区外へ延びるものが多く、全長がわかるものは少ないが、唯一溝12のみ遺構検出時に2.2ｍを測ることを確認した。溝16を除き、溝01の埋土上面に平面プランの一部が観察でき、溝01が完全に埋没した後に掘削されていることが判る。これらは何らかの耕作に伴う溝で、樋口小路及び宅地の一部が巷所化したことを示す遺構と考えられる。ただし、幅の広い溝08のみは複数の耕作溝が重複しているか、別の落込み遺構であった可能性もある。

一部の溝の埋土からは土師器や須恵器などの小片の出土が僅かに見られたが、時期を確定する

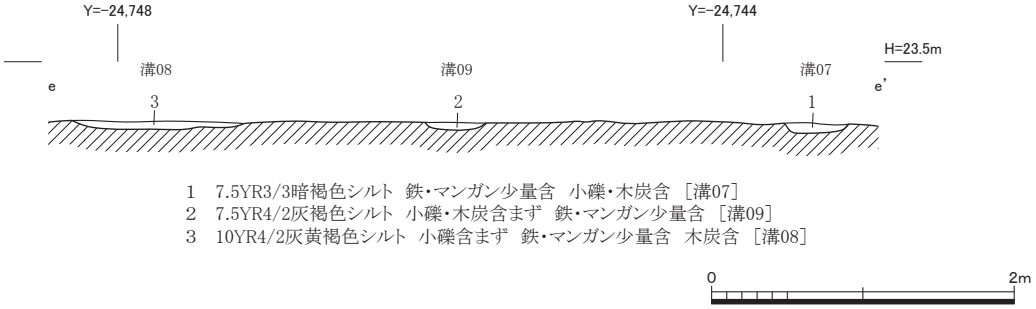


図16　溝07・溝08・溝09断面図（１：50）

には至らなかった。ただし多くは溝 01 が完全に埋没した後の遺構であり、少なくとも 10 世紀前半よりも新しいと考えられる。ちなみに「１次調査」の所見では同様の耕作溝は 10 世紀中葉～11 世紀代の遺構である可能性が高いと報告されている。

その他の遺構

溝 11（図 13・14）

溝 11 は溝 02 と溝 04 の中間、A- ２区、B- ２区、C- ２区から検出した東西溝である。条坊遺構と同じ面で記録を取ったが、調査時はこの上位、第３層から存在していることを確認している。検出全長約 6.5 ｍを測り、溝の西側は撹乱によって滅失し、東端は調査区東壁の約 0.7 ｍ手前で途切れている。ただし、調査区東壁面には本溝の埋土断面が観察できることから（図７a 断面-12)、実際はさらに長い溝であり、溝底レベルは東から西に向かって下降していたことが判る。埋土は 10YR4/1 褐灰色砂質土を主体とする。出土した陶磁器などから、近代の耕作等に伴う溝と推定される。

埋め甕 06（図 17）

埋め甕 06 は A- ４区より検出した。地山（第５層）を直径 0.5 ｍ、深さ 0.2 ｍ程掘り込んだ掘り方に常滑窯産の大甕を据え置いているが、埋設自体は第３層上面付近から行われていることを重機掘削時に確認している。甕は近代の道明寺甕と呼ばれるもので、掘り方の埋土中からも近代の陶磁器、ガラスなどが出土した。甕の内面の一方には屎尿痕と推定される白色石化付着物が認められるので、当地にかつて存在した民家の便槽であったと推定される。

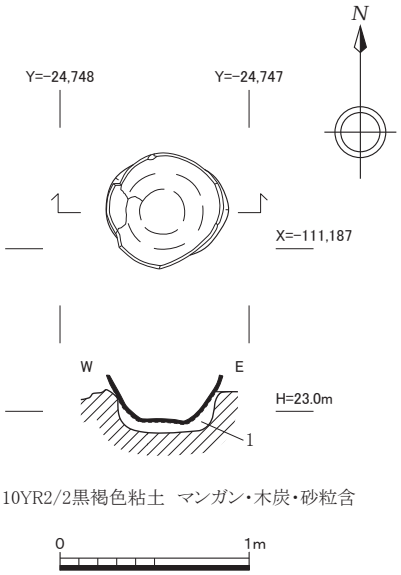


図17　埋め甕06実測図（１：40）

３　出土遺物

今回の発掘調査で出土した遺物には、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、中国磁器、瓦などが見られるが、その量はコンテナ整理箱６箱分と少なく（表３）、土器、陶磁器以外、微細な木片が僅かに得られたのみである。遺物の約 49％は溝 01 埋土及びその上面からの出土である。遺物の内訳を破片点数で見ると、須恵器、土師器が約９割を占め、灰釉陶器や緑釉陶器などの国産高級陶器や、黒色土器、中国磁器、瓦の割合は極めて低い。

以下、各遺構から出土した主要遺物の特徴について記述する。尚、須恵器の器種名については平城宮分類[4]に準拠している。

表３　遺物概要表

時　代	内　容	コンテナ数	Ａランク点数	Ｂランク点数	Ｃランク箱数
古墳時代	須恵器		須恵器３点		
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、山茶椀、瓦		土師器６点　須恵器 29 点 灰釉陶器５点　緑釉陶器５点 黒色土器２点　山茶椀１点 瓦２点		
鎌倉時代	焼締陶器、瓦質土器、中世須恵器、中国磁器		焼締陶器１点 瓦質土器２点　中世須恵器２点 中国磁器１点		
江戸時代	施釉陶器		施釉陶器２点		
近　代	施釉陶器		施釉陶器１点		
合　計		７箱	62 点		４箱

※コンテナ箱数の合計は、遺物整理後Ａランク遺物を抽出したことにより、出土時より３箱多くなっている。

溝 01 埋土下層出土遺物（図 18 - １～13）

溝 01（樋口小路南側溝）の埋土下層（礫・粗砂層）及び底面から出土した主要遺物には、以下のものが見られる。

［土師器］　１は土師器椀 Ac' で、口径 13.0cm を測る。平底で丸い体部を有し、口縁端部は短く外反する。体部外面中央には連続した指押さえ痕が認められ、口縁部にはヨコナデ調整が施される。２は大型の杯Ｂ蓋で、推定口径 20.1cm を測る。天井部は弱い張りをもち口縁端部は下方へ短く屈曲する。天井部外面には回転ヘラ削り、内面には横方向のヘラミガキが加えられる。３は高杯の脚部でハの字形に大きく開く形状である。外面はヘラによる縦方向の面取りが行われ、断面は八角形を呈するものと推定される。内面はナデ調整が行われている。これら１～３の土師器は何れも１Ｃ段階、９世紀前半に比定することができる。

［須恵器］　５～７は杯Ｂ蓋である。５は口径 19.4cm、６・７は口径 16.6cm 内外を測り器高の低い扁平な器形である。天井部は中央部分が平らで、外縁は緩やかに屈曲した後水平に折れ曲がり、口縁端部は下方に短く屈折する。５と７の天井部外面には回転ヘラ切り痕が残る。７は天井部中

央に宝珠形つまみを伴うが、６は内面に墨痕が見られ、転用硯として使用されていることから、つまみを持たないタイプと思われる。何れも篠窯産と思われ、５・６は９世紀前半～中葉、７は９世紀前半に帰属するものと考えられる。８は箱形の体部をもった杯Ｂで、高台径 13.3cm を測る。底部外面には回転ヘラ削り調整が行われ、底部の外縁近くに角高台が貼付される。12 も杯Ｂで高台径 9.5cm を測る。回転ヘラ削り後、軽いナデ調整を加えた底部を持ち、高台は若干外方へ開く形状を呈する。ともに９世紀前半に比定できると考えられる。11 は壺Ｌの底部である。高台径 8.7cm を測り、回転糸切り痕を残す底部外縁に角高台を貼付する。体部外面には回転ヘラ削り調整を加える。９世紀初め～前半のものと考えられる。13 は壺Ｇである。底径 5.5cm を測る小型、平底の壺で、底部外面に回転糸切り痕を残す。体部が直線的に立ち上がる器形を呈する。黒い色調の独特な粗い胎土をもち、助宗窯産と考えられる。８世紀末～９世紀初め頃に比定することができ

表４　出土遺物の点数とその割合
（古墳時代～中世）

種　別	点 数※	割合（%）
土師器	370	51.6
須恵器	275	38.3
緑釉陶器	7	0.9
灰釉陶器	33	4.6
瓦	3	0.4
黒色土器	17	2.3
瓦質土器・中世須恵器	3	0.4
焼締陶器・古瀬戸・山茶椀	9	1.2
中国陶磁	2	0.3
合　計	717	100.0

※接合後の破片点数

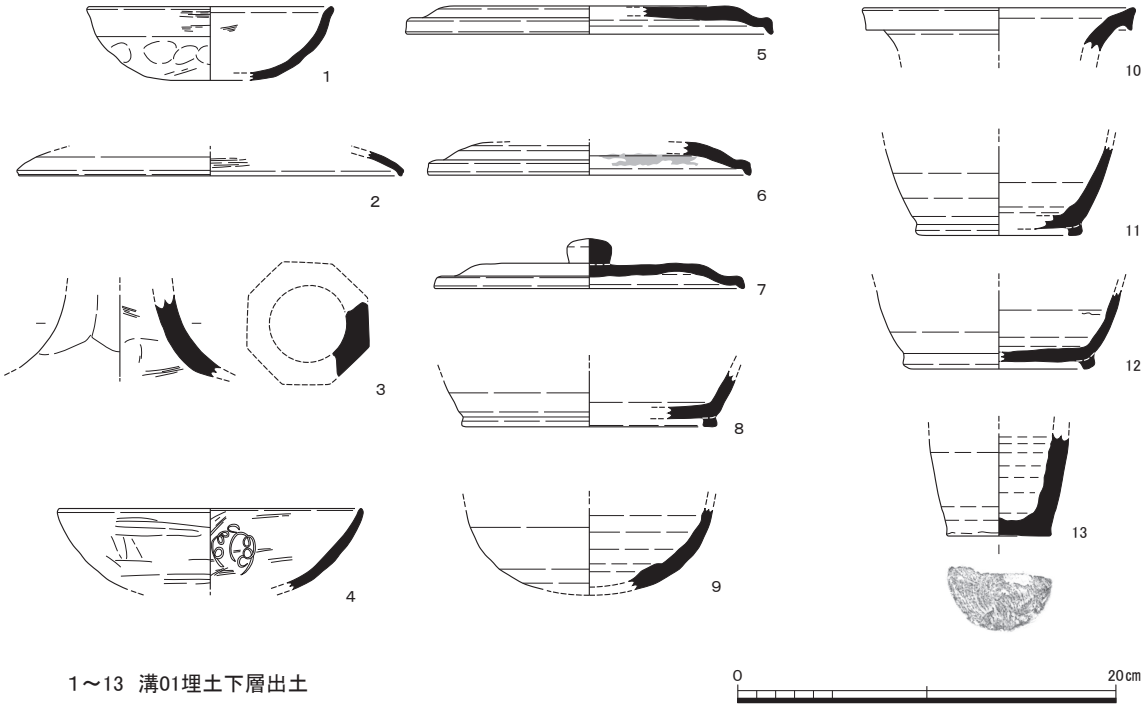


図18　出土遺物実測図１（１：４）

る。９は丸底の壺で、器壁は厚く、体部外面下半には右方向の回転ヘラ削り調整が加えられる。古墳時代後期のもので陶邑窯産と推定される。

［黒色土器］　４は黒色土器Ａ類の杯である。体部全体に弱い張りをもち、口縁は内彎気味に立ち上がる。口径 16.0cm を測る。体部内面は炭素の吸着により漆黒色を呈し、精緻なヘラミガキが施され、さらに渦状の細かい暗文が加えられている。また体部外面には横方向のヘラ削り調整が施される。９世紀前半に比定することができる。

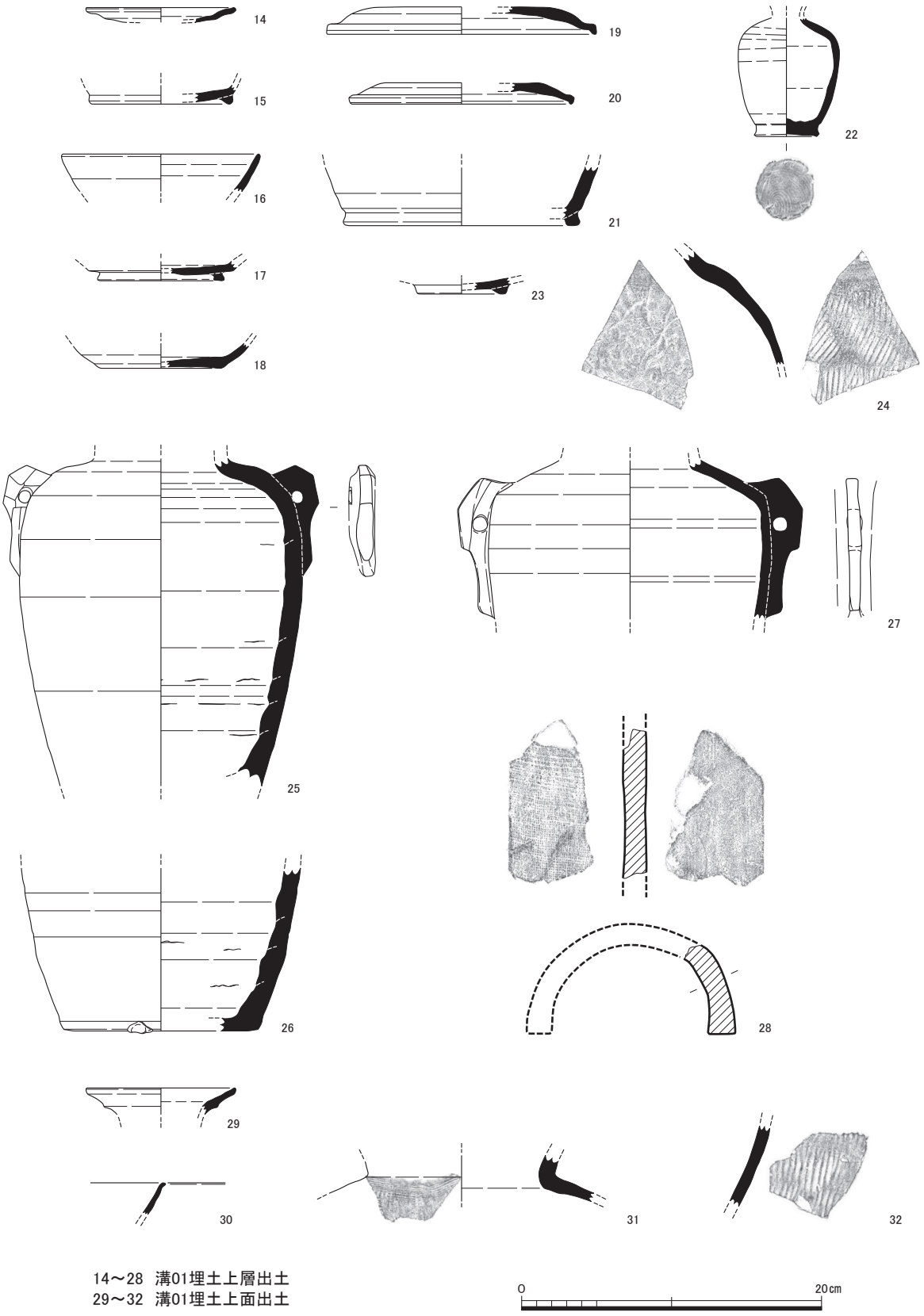
［灰釉陶器］　10 は灰釉陶器の長頸壺（瓶）の口縁部である。口径 14.3cm を測り、逆ハの字形に大きく開く器形をもつ。口縁端部は若干垂下するように面を形成する。口縁端面から内面にかけて灰釉が施されている。猿投窯産で K-14 窯式、９世紀前半のものである。

溝 01 埋土上層出土遺物（図 19 - 14 ～ 28）

溝 01（樋口小路南側溝）埋土上層（シルト質泥砂土層）から出土した主要遺物には、以下のものが見られる。

［土師器］　14 は土師器皿Ａで、口径 10.0cm を測る。体部中央に稜をもち、口縁端部は丸く僅かに上方へ屈曲させる器形で、薄手の器壁をもつ。内外面はナデ調整が加えられる。小振りながら３Ａ段階（10 世紀前半）に比定できると思われる。15 は杯Ｂである。底部外縁に低い付高台を伴うもので、高台径は 9.2cm と推定される。底部内外面にはナデ調整が加えられる。９世紀前半～中葉のものと思われる。

［須恵器］　16 は杯身で、口径 12.3cm を測る。体部は直線的に逆ハの字形に開く。体部外面下半には回転ヘラ削り調整が加えられる。17 は杯Ｂである。断面方形の高台を底部外縁よりも内側に貼付する。高台径は 8.5cm を測る。底部外面には回転ヘラ削り調整が行われる。18 は無高台の杯Ａで、底径 8.0cm を測る。底部外面にはヘラ切り後軽いナデ調整が施されている。17 は９世紀初め～前半、16・18 は９世紀代のものと考えられる。19・20 は杯Ｂ蓋で、前者は口径 17.8cm、後者は 14.6cm を測る。共に天井部中央は平らで、口縁に向かって緩やかに屈曲した後、口縁端部は丸く短く内折する。天井部外面はヘラ切り後ナデ調整が加えられている。共に９世紀前半の遺物と考えられる。21 は大型の鉢Ｄと思われるもので、底部外縁に外方へ広がる角高台を貼付する。高台径 15.4cm を測る。体部下半は斜め上方に立ち上がり、外面にはヘラ削り調整が行われる。篠窯産で９世紀前半のものと推定される。22 は壺Ｍである。倒卵形の胴部をもち、底部は平高台状に突出する。底径 4.0cm を測り、底部外面には回転糸切痕が残る。胴部外面の一部にはヘラ削り後のナデ調整痕が見られる。９世紀前半に比定できる。25・27 は壺Ｎ（双耳壺）である。長い体部をもち、最大径 18cm 内外を測る肩部の相対する位置に縦長の板状の耳を貼付する。耳はヘラ切りによって多角形に整形され、直径約 1 cm の穿孔が行われる。25 は砂粒の多い粗い胎土をもち、体部外面上半に回転ヘラ削り調整が行われる。路面 13 から出土した小破片とも接合している。一方 27 は器壁がより薄手で緻密な胎土をもち、胴部外面のヘラ削りは認められない。何れも９世紀前半のものと考えられる。26 は平底の壺底部で、体部内面の輪積みの接



14～28　溝01埋土上層出土
29～32　溝01埋土上面出土

図19　出土遺物実測図２（１：４）

合痕が顕著である。底径は 13.0cm 内外と推定される。接合はしないが胎土の状態などから 25 と同一個体の可能性もある。また 27 については後述する路面 13 出土の壺（図 20 - 48）と同一個体である可能性が高い。24 は甕で、体部上半に相当する。外面には平行叩き目が顕著に見られ、内面の当て具痕は軽くナデ消されている。

［黒色土器］ 23 は黒色土器 A 類の椀である。低い逆台形の付高台を有し、高台径は約 6.0cm と推定される。底部内面には炭素が吸着され、微かにヘラミガキ痕が認められる。胎土は軟質である。９世紀後半～ 10 世紀代のものと考えられる。

［瓦］ 28 は丸瓦（男瓦）で厚さ 1.8cm、推定幅 13.9cm を測る。凹面は布目圧痕が見られるが、凸面は摩耗により調整痕を留めない。端面はヘラ切りにより面取りされている。外面には炭素の吸着が見られる。８～９世紀代のものと推定される。

溝 01 埋土上面出土遺物（図 19 - 29 ～ 32）

溝 01 の埋土上面レベルから出土した主要遺物には、以下のものが見られる。

［須恵器］ 31・32 は甕である。31 は胴部と頸部の接合部で、頸部は斜め上方に逆ハの字形に開く様相を見せる。体部外面には平行叩き後ナデ調整が加えられ、頸部との境近くには横方向のカキ目が認められる。32 は体部片で、外面の平行叩き目が顕著である。内面の当て具痕は丁寧にナデ消されている。胎土は灰白色を呈し、内外面には黄土がハケによって塗布されており、猿投窯産の特徴を有している。31・32 共に８～９世紀代のものと考えられる。

29 は瓮である。口径 9.9cm を測る。口縁は外面が稜を伴って屈曲した後、逆ハの字形に開く。内外面ロクロナデ調整が行われる。古墳時代後期の 7 世紀代の遺物と思われる。包含層から出土した瓮（図 21 - 52）と同一個体の可能性が高い。

［灰釉陶器］ 30 は椀の口縁部である。口縁端部は短く外反し、尖り気味に仕上げられる。内面には灰釉が僅かに見られるが、自然釉のように斑である。猿投窯産で、K - 90 窯式（９世紀後半）に比定することができる。

溝 02 出土遺物（図 20 - 33 ～ 35）

溝 02（樋口小路北側溝）からの主要出土遺物には、以下のものが見られる。

［須恵器］ 35 は大型の甕である。体部下半の一部で、外面には格子目状叩き目、内面には青海波状の同心円当て具痕が残る。断面から幅３cm 程の輪積み痕が観察できる。８～９世紀のものと考えられる。

［緑釉陶器］ 34 は緑釉陶器の椀である。削り出しによる円盤状の平高台を有するもので、高台径は 9.1cm を測る。全体に摩耗が著しく、器面調整の詳細は不明であるが、高台と体部の境に僅かながら緑釉の付着が認められる。胎土は軟陶で灰白色を呈する。洛北窯産で、９世紀前半のものと推定される。

［灰釉陶器］　33 は折縁皿である。口径 14.5cm、高台径 7.2cm を測る。体部下半は直線的で、口縁端部は弱い稜を伴って屈曲した後、短く水平に折れ曲がる。底部の作りは厚く、低い角高台が貼付される。胴部外面下半及び底部外面には回転ヘラ削り調整が施されている。内面全体に刷毛塗りによる灰釉が施され、重ね焼き時の高台の接着痕が残る。猿投窯産で、K - 14 窯式（９世紀前半）に比定することができる。

溝 14 出土遺物（図 20 - 36 ～ 40）

溝 14 から出土した主要遺物には、以下のものが見られる。

［土師器］　38 は土師器皿である。口径 13.4cm を測る。体部全体に丸みをもった浅い皿で、口縁部は内彎する。全体に摩耗し、体部外面の調整は不明瞭であるが、１C 段階（９世紀前半）の遺物と推定される。

［須恵器］　36 は杯 B 蓋で、口径 13.2cm を測る。天井部には欠落したつまみの痕跡を残す。天井部は僅かな張りをもち、口縁に向かって緩やかに屈曲した後、口縁端部は尖り気味に短く内折する。天井部外面中央付近には回転ヘラ切り痕とナデ調整痕が見られる。篠窯産で９世紀前半の遺物と考えられる。37 は無高台の壺 L である。底径 7.5cm を測り、突出した底部外面には回転糸切り痕を残す。体部は緩やかな張りを伴いながら立ち上がる。内面のロクロ痕が顕著である。砂粒の多い粗い胎土をもつ。９世紀後半のものと考えられる。

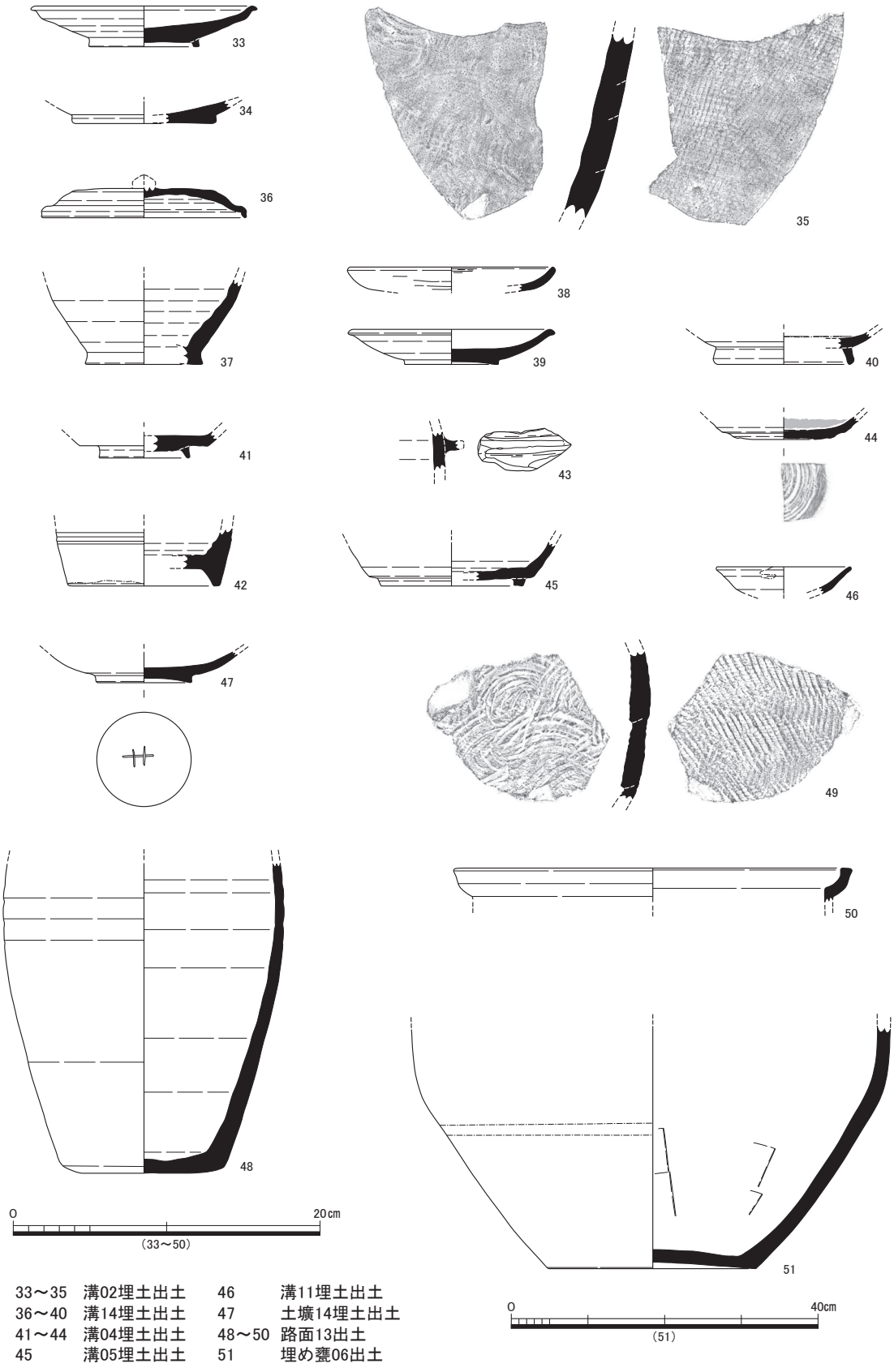
［緑釉陶器］　39 は緑釉陶器の皿で、口径 13.1cm、高台径 6.2cm を測る。高台は削り出しによって突出させた円盤状の平高台である。体部全体に弱い張りをもち、口縁端部は短く外反する。体部外面下半は回転ヘラ削り、体部外面上半から内面にはヘラミガキが行われている。ハケ塗りによる釉はごく薄くオリーブ灰色を呈するが、底部内面中央は重ね焼きのため露胎となっている。胎土は硬陶で須恵質である。洛西窯産で９世紀後半のものと考えられる。

［灰釉陶器］　40 は高台径 8.8cm を測る椀である。高台は高く、所謂「三日月高台」を呈するが、外面の稜に鋭さを欠き退化した様相が見られる。体部外面には回転ヘラ削り調整が施される。内面には底部を除き灰釉が施され、重ね積みの高台接着痕が残る。東濃窯産で、光ヶ丘１号窯式の新相（９世紀末頃）に比定できる。

路面 13 出土遺物（図 20 - 48 ～ 50）

路面 13（樋口小路路面及び覆土）から出土した主要遺物には、以下のものが見られる。

［須恵器］　48 は壺である。底径 10.5cm を測る。体部全体に弱い張りをもち、上半部が最大径となる細長い器形である。体部外面は丁寧なナデ調整で整えられる。また底部内面には静止指ナデ痕が認められる。黄灰色の胎土をもち、器壁は薄手に仕上げられる。溝 01 埋土上層から出土した小破片と接合しており、同じく溝 01 埋土上層から出土した壺 N（図 19 - 27）とも色調や胎土が近似し、同一個体である可能性が高い。８世紀後半～９世紀前半のものと考えられる。49 は大型の甕の体部片である。体部外面には斜方向の縄目叩きが羽状に行われ、内面は同心円状の当て



33～35	溝02埋土出土	46	溝11埋土出土
36～40	溝14埋土出土	47	土壙14埋土出土
41～44	溝04埋土出土	48～50	路面13出土
45	溝05埋土出土	51	埋め甕06出土

図20　出土遺物実測図３（１：４、１：８）

具痕がそのまま残される。断面から幅4cm程の粘土紐接合痕が認められる。８～９世紀代のものと推定される。

［瓦質土器］　50は瓦質土器の鍋である。推定口径は25.8cmである。口縁は体部から外折した後、受け口状に立ち上がる。口縁部内外面はヨコナデ調整が施されている。全体に摩耗しているが、内面はカーボンの吸着が明瞭である。13世紀代のものと考えられる。

溝04出土遺物（図20‐41～44）

溝04から出土した主要遺物には、以下のものが見られる。

［緑釉陶器］　41は緑釉陶器の稜皿と思われる。厚手の底部にはハの字形に開く三角高台が貼付される。高台径5.2cmを測る。体部は明確な稜を伴って屈曲し斜め上方に開く。底部外面には回転糸切り痕、体部外面下半には回転ヘラ削り調整が行われる。ヘラミガキは施されない。釉は内面のみに施されているが、灰黄色の釉層はごく薄く随所で剥落し、トチン痕が認められる。胎土はやや軟質で灰白色を呈する。10世紀代の遺物と考えられる。

［須恵器］　44は椀である。無高台で底径5.7cmを測る。また底部外面には粗い回転糸切り痕が残る。体部外面のロクロ目が顕著である。底部は薄く内面は平滑で使用痕がある。墨痕が認められることから転用硯として使用されたと思われる。胎土はやや軟質で灰白色を呈する。中世・東播系の椀で、13世紀に比定できると思われる。

［瓦質土器］　43は瓦質の羽釜である。直立した口縁近くの破片で、外面に鍔が貼付される。表面は炭素を吸着させている。胎土は軟質で、全体に摩耗が顕著のため器面調整は不詳である。13世紀代のものと推定される。

［中国陶磁］　42は青白磁の梅瓶である。高台径9.9cmを測る。高台は削り出しにより作出され、底部外面には回転ヘラ削り調整が施される。体部は直線的に立ち上がり、外面には２条のヘラ描き沈線が巡る。釉は体部外面と内面全体に厚く施される。釉調は青味を帯びた灰白色を呈し、貫入が見られる。胎土は緻密で硬質である。中国景徳鎮窯又は福建省産で13世紀中葉～後半の製品と考えられる。

溝05出土遺物（図20‐45）

溝05からは、土師器、黒色土器、緑釉陶器などの小片の他、次の須恵器が出土している。

［須恵器］　45は須恵器杯Ｂである。高台径9.3cmを測る。高台は断面方形の角高台で、底部外縁より内側に貼付されている。体部は口縁に向かって直線的に開く箱形である。底部外面には回転ヘラ切り痕、体部外面には回転ヘラ削り調整痕が認められる。９世紀前半の遺物と考えられる。

溝11出土遺物（図20‐46）

溝11からは次の遺物の他、主に近代の陶器（土瓶・壺）、磁器（染付椀・白磁燗徳利）などの小片が出土している。

［陶　器］ 46 は灯明皿で、口径 8.7cm を測る。体部下半に僅かな張りをもち口縁は緩やかに外反する。体部外面下半には回転ヘラ削り調整が行われる。内面全体に黄灰色の灰釉を施し、外面は露胎である。京・信楽系の製品で 19 世紀前半のものと考えられる。

土壙 10 出土遺物（図 20 - 47）

土壙 10 からは須恵器、灰釉陶器の小片の他、次の緑釉陶器が出土している。

［緑釉陶器］ 47 は緑釉陶器の皿である。高台径 6.0cm を測る。高台は削り出しによって作出された円盤状の平高台で、内反り気味に仕上げられる。またその外面中央には「キ」に似たヘラ記号が刻まれている。体部内面にはヘラミガキが施される。施釉は全面施釉であるが、釉層は薄くやや青味をもった灰白色を呈する。また外面の釉は還元作用により銀化している。胎土は緻密で硬陶である。洛西窯産で 9 世紀後半のものと考えられる。

埋め甕 06 出土遺物（図 20 - 51）

埋め甕 06 として使用された遺物である。

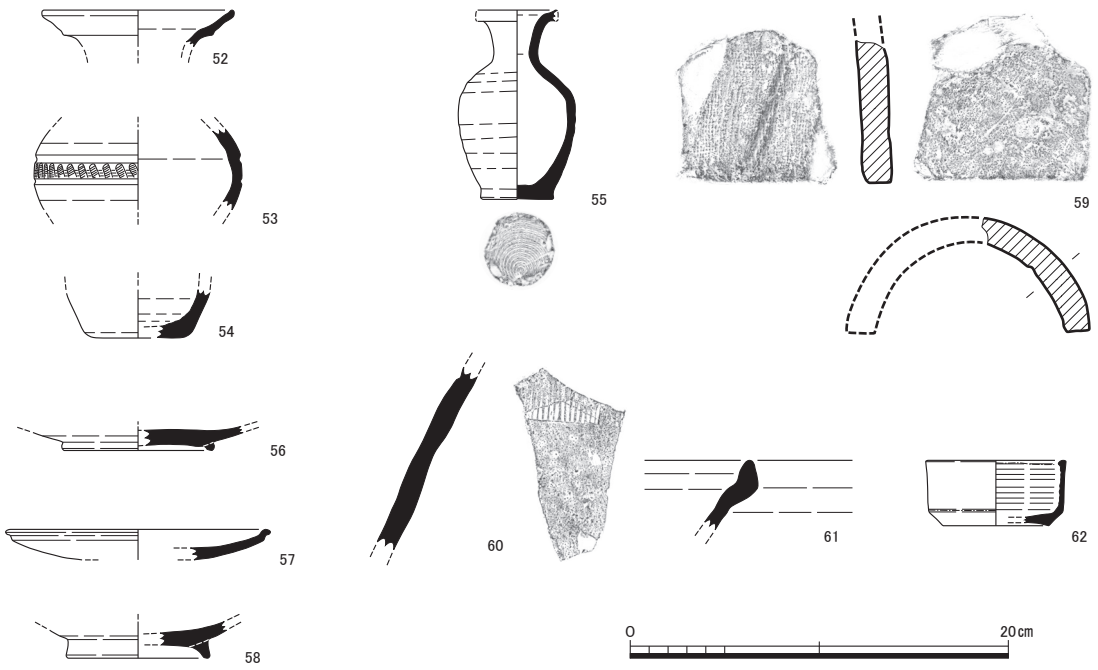
［陶　器］ 51 は大甕である。底径 27.0cm を測る。底部は平底で、体部下半は若干の丸みをもち、上半は垂直気味に立ち上がる器形である。体部外面下半には積み重ねて焼成したことを示す帯状の痕跡を留める。また底部外面には離れ砂痕が見られる。全面に茶褐色の錆釉がハケにより塗布されている。内面には屎尿痕と推定される白色石化付着物が認められる。常滑窯産の道明寺甕と呼ばれるもので、19 世紀末～ 20 世紀初めの製品と考えられる。

包含層出土遺物（図 21 - 52 ～ 62）

包含層から出土した遺物には以下のものが見られる。また小片のため図示しなかったが、中国龍泉窯系の青磁蓮弁文椀、古瀬戸灰釉皿（鉢）なども僅かに出土している。

［須恵器］ 52 は瓹の口縁部で口径 9.9cm を測る。口縁は外面が稜を伴って屈曲した後、逆ハの字形に開く。内外面ロクロナデ調整が行われる。7 世紀代の遺物と考えられる。溝 01 埋土上面から出土したもの（図 19 - 29）と同一個体である可能性が高い。53 も瓹で球形の体部をもつ。体部外面中央には 2 条の平行ヘラ描き沈線を引き、この間に櫛歯状原体による刻みを加えている。また体部外面には回転ヘラ削り調整痕が認められる。6 世紀代の遺物と考えられる。55 は壺 M である。推定口径 4.2cm、器高 10.0cm の小型の壺で、倒卵形の体部と逆ハの字形に開く細長い口頸部をもつ。底部は下方へ少し突出した平底で、外面には回転糸切り痕を残す。9 世紀中葉のものと考えられる。54 は小型の壺と思われる。底径 4.8cm を測る。全体に摩耗し外面の調整の詳細は不明である。61 は片口鉢である。体部は斜め上方に広がり、肥厚した口縁は内側へ「く」字形に屈曲する。東播系の中世須恵器で、12 世紀後半頃のものと考えられる。

［緑釉陶器］ 57 は折縁皿である。口径 13.8cm を測る。体部全体に弱い張りをもち、口縁端部は稜を伴って屈曲した後短く外折する。体部外面には回転ヘラ削り、内面全体はヘラミガキが行わ



52～62　包含層出土

図21　出土遺物実測図４（１：４）

れている。全面に施釉されるが釉層はごく薄く、青味のある浅黄色を呈する。胎土は緻密で硬陶である。洛西窯産で９世紀後半のものと考えられる。

［灰釉陶器］　56 は皿で、高台径 7.8cm を測る。底部の作りは厚く、その外縁に低い角高台が貼付される。底部及び体部外面には回転ヘラ削り調整が行われる。また底部外面には三叉トチンの痕跡が見られる。施釉は内面に灰釉がハケ塗りによって行われる。猿投窯産で、K-14 窯式（９世紀前半）に比定することができる。

［山茶椀］　58 は椀で、高台径 7.5cm を測る。高台は付高台で断面三角形を呈し、端部は外方へ若干開く。底部外面には回転糸切痕が残る。胎土はやや粗く青灰色を呈する。高台端部に板状（？）の圧痕が見られる。初期の東遠型山茶椀と考えられ、11 世紀末～ 12 世紀初めに比定できると思われる。

［陶　器］　60 は焼締陶器の甕である。体部下半の破片で、外面には平行押印文が施されている。胎土は硬質で明褐灰色を呈する。常滑窯産で、12 世紀後半～ 13 世紀前半のものと考えられる。62 は餌じょく（餌鉢）である。口径 7.4cm、器高 3.5cm を測る。体部下半に稜を伴い口縁が直立する器形である。体部外面下半から底部外面、口縁端部を除き灰釉が施される。京・信楽系で 19 世紀前半の製品と考えられる。

［瓦］　59 は丸瓦（男瓦）で厚さ 1.5cm、推定幅 13.0cm を測る。凹面は布目とその捻じれ圧痕が見られるが、凸面は摩耗により調整痕を留めない。端面はヘラ切りにより面取りされている。胎土は焼成不良で軟質である。８～９世紀代のものと推定される。

註

（１）『平安京右京六条三坊一町跡・西院遺跡発掘調査報告書』（株）文化財サービス　2021 年

（２）「延喜式」に規定される平安京の道路は、築地、犬行（犬走）、側溝、路面で構成され、幅は築地心から築地心までの距離で表記される。小路の場合、道路幅は４丈（約 12 m）で（堀川小路、西堀川小路は８丈）、その内訳は築地幅半分 2.5 尺（約 0.75 m）×２、犬行幅３尺（約 0.9 m）×２ 、路面幅２丈３尺（約 6.9 m）、側溝幅３尺（約 0.9 m）×２である。１丈＝ 10 尺≒ 2.98 m

（３）『平安京跡研究調査報告第 20 輯・平安京右京六条三坊』（財）古代学協会　2004 年

（４）「須恵器器種表」『平城宮発掘調査報告Ⅺ』奈良国立文化財研究所　1982 年

表５　出土遺物観察表

掲載番号	器種	器形	出土区	出土遺構・層位	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	色調	推定時期	備考
図 18 -1	土師器	椀 A c	C- 5	溝 01　埋土下層（砂利層）	13.0	3.9	4.0	7.5YR7/4 橙	1 C 段階（9 世紀前半）	体部外面に指オサエ 口縁部ヨコナデ
2	土師器	杯 B 蓋	C- 4	溝 01　埋土下層（砂利層）	20.1	(1.3)		5YR5/6 明赤褐	1 C 段階（9 世紀前半）	天井部外面に回転ヘラ削り、内面ヘラミガキ
3	土師器	高杯	C- 5	溝 01　埋土下層（砂利層）		(4.3)		7.5YR6/4 にぶい橙	1 C 段階（9 世紀前半）	脚部外面に面取り
4	黒色土器 A 類	杯	C- 5	溝 01　埋土下層（砂利層）	16.0	(4.3)		内面：N1.5/0 外面：7.5YR7/2	9 世紀前半	内面ヘラミガキ・暗文 外面ヘラ削り
5	須恵器	杯 B 蓋	B- 5	溝 01　埋土下層（砂利層）	19.4	(1.5)		N6/0 灰	9 世紀前半～中葉	天井部外面に回転ヘラ削り、篠窯産？
6	須恵器	杯 B 蓋	C- 4	溝 01　埋土下層（砂利層）	16.8	(1.8)		N6/0 灰	9 世紀前半～中葉	天井部内面に墨痕 転用硯、篠窯産？
7	須恵器	杯 B 蓋	B- 5	溝 01　埋土下層（砂利層）	16.5	2.6		N6/0 灰	9 世紀前半	宝珠形つまみを伴う 篠窯産？
8	須恵器	杯 B	C- 5	溝 01　埋土下層（砂利層）		(3.0)	13.3	2.5Y8/1 灰白	9 世紀前半	底部、体部外面にヘラ削り 篠窯産？
9	須恵器	壺	C- 5	溝 01　埋土下層（砂利層）		(4.4)		N6/0 灰	古墳時代後期	体部外面回転ヘラ削り 陶邑窯産？ ハソウの可能性あり
10	灰釉陶器	長頸壺（瓶）	A- 5	溝 01　埋土下層（砂利層）	14.3	(2.3)		胎土：10YR8/1 釉：2.5Y8/3	9 世紀前半	頸部内外面に灰釉 猿投窯産、K-14 窯式
11	須恵器	壺 L	C- 5	溝 01　埋土下層（砂利層）		(4.8)	8.7	2.5Y8/1 灰白	9 世紀初～前半	底部外面に回転糸切痕 篠窯産？
12	須恵器	杯 B	B- 5	溝 01　埋土下層（砂利層）		(4.2)	9.5	N6/0 灰	9 世紀前半	底部外面ヘラ切り後静止ナデ
13	須恵器	壺 G	C- 5	溝 01　埋土下層（砂利層）		(5.5)	5.5	N5/0 灰	8 世紀末～ 9 世紀初め	底部外面に回転糸切痕全体に摩耗、助宗窯産
図 19 -14	土師器	皿 A	A- 4	溝 01　埋土上層（灰褐シルト層）	10.0	(1.0)		7.5YR8/3 浅黄橙	3A 段階 10 世紀前半	体部内外面ナデ調整
15	土師器	杯 B	A- 5	溝 01　埋土上層（暗灰シルト層）		(1.3)	9.2	7YR7/6 橙	9 世紀前半～中葉	貼付高台
16	須恵器	杯	B- 5	溝 01　埋土上層（暗灰シルト層）	13.3	(2.5)		内外面：N4/0 断面：5YR5/1	9 世紀	体部外面下半に回転ヘラ削り
17	須恵器	杯 B	B- 5	溝 01　埋土上層（暗灰シルト層）		(1.3)	8.5	10YR7/1 灰白	9 世紀初～前半	底部外面回転ヘラ削り
18	須恵器	杯 A	C- 4	溝 01　埋土上層（暗灰シルト層）		(1.7)	8.0	2.5Y7/1 灰白	9 世紀	底部外面回転ヘラ切り 篠窯産？
19	須恵器	杯 B 蓋	C- 4	溝 01　埋土上層（暗灰シルト層）	17.8	(1.8)		N5/0 灰	9 世紀前半	天井部外面回転ヘラ切り後ナデ
20	須恵器	杯 B 蓋	A- 5	溝 01　埋土上層（暗灰シルト層）	14.6	(1.4)		N5/0 灰	9 世紀前半	天井部外面回転ヘラ切り後ナデ
21	須恵器	鉢 D	A- 5	溝 01　埋土上層（暗灰シルト層）		(3.9)	15.4	N6/0 灰	9 世紀前半	篠窯産？
22	須恵器	壺 M	B- 4	溝 01　埋土上層（暗灰シルト層）		(6.9)	4.0	N6/0 灰	9 世紀前半	底部外面回転糸切痕
23	黒色土器 A 類	椀	A-4	溝 01　埋土上層（灰褐シルト層）		(1.1)	6.0	内面：N2/0 外面：10YR8/2	9 世紀後半～ 10 世紀	底部内面ヘラミガキ
24	須恵器	甕	B- 5	溝 01　埋土上層（暗灰シルト層）		(8.2)		N4/0 灰	9 世紀	体部外面平行叩き、内面当て具痕（ナデ消し）
25	須恵器	壺 N（双耳壺）	B- 4 C- 4	溝 01　埋土上層（暗灰シルト層） 路面 13　路面上		(21.9)		N6/0 灰	9 世紀前半	ヘラ切りで成形した有孔耳貼付、26 と同一個体か？
26	須恵器	壺	B- 5	溝 01　埋土上層（暗灰シルト層）		(10.9)	13.0	N6/0 灰	9 世紀前半	胴部外面に回転ヘラ削り、25 と同一個体か？
27	須恵器	壺 N（双耳壺）	B- 4	溝 01　埋土上層（暗灰シルト層）		(10.6)		N6/0 灰	9 世紀前半	ヘラ切りで成形した有孔耳貼付、48 と同一個体か？
28	瓦	丸瓦	B- 5	溝 01　埋土上層（暗灰シルト層）	(幅 13.9)	(5.9)		外面：N3/0 胎土：5Y7/1	8 ～ 9 世紀	内面に布目痕
29	須恵器	甕	B- 5	溝 01　埋土上面	9.9	(1.8)		N7/0 灰白	7 世紀	52 と同一個体か？
30	灰釉陶器	椀	B- 5	溝 01　埋土上面		(2.1)		5Y7/2 灰白	9 世紀後半	体部内面に灰釉 猿投窯産、K - 90 窯式
31	須恵器	甕	C- 5	溝 01　埋土上面		(2.1)		N6/0 灰	8 ～ 9 世紀	体部外面平行叩き後ナデ、カキ目
32	須恵器	甕	B- 5	溝 01　埋土上面		(5.3)		2.5Y7/1 灰白	8 ～ 9 世紀	体部外面平行叩き、内外面黄土塗布、猿投窯産

掲載番号	器種	器形	出土区	出土遺構・層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	推定時期	備考
図 20 -33	灰釉陶器	折縁皿	B- 3	溝 02　埋土 (暗灰シルト層)	14.5	2.6	7.2	胎土：5Y7/1 釉：2.5Y6/3	9 世紀前半	体部内面に灰釉刷毛塗り 猿投窯産、K - 14 窯式
34	緑釉陶器	椀	C- 3	溝 02　埋土 (灰シルト層)		(1.7)	9.1	10YR5/2	9 世紀前半	削り出し円盤状高台 摩耗により釉殆ど剥落 軟陶、洛北窯産
35	須恵器	甕	C- 3	溝 02　埋土 (灰シルト層)		(10.5)		外面：N5/0 内面：N6/0 胎土：N7/0	8 ～ 9 世紀	外面格子目状叩き、内面同心円状当て具痕
36	須恵器	杯 B 蓋	B- 3	溝 14　埋土 (灰シルト層)	13.2	(1.9)		N6/0 灰	9 世紀前半	宝珠形つまみ欠損 篠窯産？
37	須恵器	壺 L	B- 3	溝 14　埋土		(5.5)	7.5	N4/0 灰	9 世紀後半	底部外面回転糸切り痕
38	土師器	皿	A- 3	溝 14　埋土 (灰シルト層)	13.4	(1.6)		10YR7/3 にぶい黄橙	1C 段階 (9 世紀前半)	体部外面下半の削り不明
39	緑釉陶器	皿	B- 3	溝 14　埋土 (灰シルト層)	13.1	2.3	6.2	胎土：N7/0 釉：10Y6/2	9 世紀後半	削り出し円盤状高台 硬陶、底部内面露胎 洛西窯産
40	灰釉陶器	椀	C- 3	溝 14　埋土 (灰シルト層)		(2.1)	8.7	胎土：2.5Y8/1 釉：5Y6/3	9 世紀末	体部外面下半回転ヘラ削り、東濃窯産 光ヶ丘 1 号窯式
41	緑釉陶器	稜皿？	B- 2	溝 04　埋土 (灰砂層)		(1.8)	5.8	胎土：2.5Y8/2 釉：2.5Y7/2	10 世紀	軟陶、内面に薄く施釉 底部外面回転糸切り痕
42	中国磁器	梅瓶	B- 2	溝 04　埋土 (灰砂層)		(3.8)	9.9	胎土：N8/0 釉：10Y7/1	13 世紀中葉～後半	削り出し高台、体部内外面に青白磁釉、2 条沈線
43	瓦質土器	羽釜	B- 2	溝 04・05　埋土 (灰シルト層)		(2.8)		外面：N5/0 胎土：N8/0	13 世紀	溝 04 遺物
44	須恵器	椀	B- 2	溝 04・05　埋土 (灰シルト層)		(1.9)	5.7	2.5Y8/1 灰白	13 世紀	底部内面に墨痕 東播系、溝 04 遺物
45	須恵器	杯 B	B- 2	溝 05　埋土 (灰シルト層)		(3.9)	9.3	N6/0 灰	9 世紀前半	底部外面回転ヘラ切り
46	陶器	灯明皿	B- 2	溝 11　埋土 (暗砂層)	8.7	(1.8)		胎土：10YR8/2 釉：2.5Y7/3	19 世紀前半	内面に灰釉、体部外面下半回転ヘラ削り 京・信楽系
47	緑釉陶器	皿	C- 5・6	土壙 10 埋土上層 (暗灰シルト層)		(2.0)	6.0	胎土：N7/0 釉：2.5GY8/1	9 世紀後半	全面施釉、釉は銀化 円盤状高台外面にヘラ記号、洛西窯産
48	須恵器	壺	C- 3 B- 4、5	路面 13　路面上 溝 01　埋土上層		(20.2)	10.5	2.5Y6/1 黄灰	8 世紀後半～ 9 世紀前半	底部内面静止指ナデ 27 と同一個体か？
49	須恵器	甕	C- 3	路面 13　路面上		(9.6)		N6/0 灰	8 ～ 9 世紀	外面羽状の縄目叩き、内面同心円状当て具痕
50	瓦質土器	鍋	B- 3・4	路面 13　路面上	25.8	(2.2)		2.5Y8/2 灰白	13 世紀	内外面ナデ調整
51	焼締陶器	甕	B- 4	埋め甕 06		(31.6)	27.0	胎土：10R5/6 釉：10R3/2	19 世紀末～ 20 世紀初め	内外面に錆釉、底部外面に離れ砂 常滑窯産　道明寺甕
図 21 -52	須恵器	瑤	B- 2・3	第 3 層	9.9	(2.0)		N7/0 灰白	7 世紀	29 と同一個体か？
53	須恵器	瑤	A- 4	第 3 層 (黄灰シルト層)		(4.2)		N6/0 灰	6 世紀	胴部外面に 2 条ヘラ描き沈線と櫛歯刻み
54	須恵器	壺	B- 5	第 3 層 (地山直上)		(2.6)	4.8	N6/0 灰	9 世紀？	全体に摩耗
55	須恵器	壺 M	A- 4	撹乱層	(4.2)	(10.0)	3.7	N3/0 暗灰	9 世紀中葉	底部外面回転糸切痕
56	灰釉陶器	皿	C- 6	第 3 層 (黄灰シルト)		(1.3)	7.8	胎土：N8/0 釉：5Y6/2	9 世紀前半	内面全体に灰釉刷毛塗り、底部外面にトチン痕 猿投窯産、K - 14 窯式
57	緑釉陶器	折縁皿	B- 2・3	第 3 層	13.8	(1.6)		胎土：N7/0 釉：7.5Y7/3	9 世紀後半	硬陶、内面ヘラ磨き 内外面施釉、洛西窯産
58	山茶椀	椀	B- 4	第 3 層 (黄灰シルト)		(1.9)	7.5	N7/0 灰白	11 世紀末～ 12 世紀初め	底部外面回転糸切痕 東遠型？
59	瓦	丸瓦	排土中		(幅 12.8)	(6.0)		外面：10YR5/1 胎土：10YR6/2	8 ～ 9 世紀	焼成不良で軟質、内面に布目圧痕
60	焼締陶器	甕	B- 5	第 3 層 (黄灰シルト)		(9.7)		7.5YR7/2 明褐灰	12 世紀後半～ 13 世紀前半	体部外面に押印文 常滑窯産
61	須恵器	片口鉢	B- 4	第 3 層 (黄灰シルト)		(3.7)		N7/0 灰白	12 世紀後半	内外面ロクロナデ 東播系の中世須恵器
62	陶器	餌じょく	B- 2	第 3 層 (灰色砂質シルト)	7.4	3.5	5.6	胎土：N7/0 釉：7.5Y7/2	19 世紀前半	体部内面と外面上半に灰釉、京・信楽系

第Ⅳ章　総　括

今回の発掘調査では、2021年１月～３月に行った東隣接地の調査（以下「１次調査」）[1]に続き、平安京の条坊及びこれに付随する遺構等を検出することができた。最後にこれまでの記述と重複するところもあるが、その成果について総括してみたい。

平安京の条坊に直接関係する遺構は、樋口小路路面（路面13）及びその南側溝（溝01）、北側溝（溝02・溝14）である。これらの遺構は、座標数値からみても、「1次調査」で検出した条坊遺構（路面27、溝01、溝02）と矛盾の無い位置関係を示しており、それぞれの遺構が同一のものであることは疑いない（図22）。またこれらの条坊遺構は、（公財）京都市埋蔵文化財研究所が提示している平安京街路推定ラインよりも全体に１m前後南にずれていることが再確認されたが、東西約4.5km、南北約5.2kmとされる平安京の京域内にあって、この誤差は微々たるものと言って良く、当時の測量技術の高さには改めて驚かされる。

今回の調査地内において、樋口小路の路面（路面13）は幅4.6m前後が残存していることが判明した。これは小路の最終的な路面幅であり、南北両側溝の道路側への拡幅によってもたらされた結果によるものである。つまり、南側溝である溝01と当初の北側溝と考えられる溝02の心－心の位置から推定した場合、今回の調査区内では、路面は最初「延喜式」に記された二丈三尺（約6.9m）よりも若干狭い幅6.5m前後で築造されたと思われる。このことは東に隣接した「1次調査」により得られた知見とも合致する。また両側溝からの出土遺物の時期的傾向から、先ず９世紀前半代に南側溝が路面側に拡幅され、その後南側溝が埋没する過程において（９世紀末頃）、北側溝（溝02）が溝14により拡幅されて最終的な路面形態を呈すに至ったという、少なくとも２段階の変遷があったことが看取される。

路面の構造については、断ち割り調査の結果、礫層又はシルト層である基盤（地山）を均したもので、この上に厚さ３～５cmの薄い褐色シルト土が覆っていることが判明した。このシルト土からは、溝01埋土上層出土遺物と接合する遺物が出土していることから（図19 - 25、図20 - 48）、人為的な整地土というよりも、側溝の溢水等による自然堆積土を成因としている可能性が高いと思われる。ただし本層上面レベルは南北両側溝の遺構検出面であったことから、少なくとも路面の最終段階の姿を示していると考えられる。この路面13の最終標高は23.07～23.17mで、「１次調査」の路面27の23.1m前後、本調査区の東方、六条三坊七町～十町の調査[2]で検出された樋口小路路面22.7～23.1m、轍跡が見つかった馬代小路との交差点近くの路面22.8mなどと大差無いレベル値を示しており、近辺の樋口小路は高低差の少ない平坦な路であったことが確認できる。

南側溝である溝01は、幅2.5m前後、深さを0.4～0.5mを測り、幅は「延喜式」の規定三尺（約0.9m）の約３倍とかなり広いものであった。これは先述のとおり路面側、犬行側双方に拡幅が行われた結果によるものである。溝の拡幅は、排水処理機能の維持向上を目的に行われた施工であるが、その効果は必ずしも十分とは言えず、出土遺物の傾向から遅くとも10世紀前半には泥土に

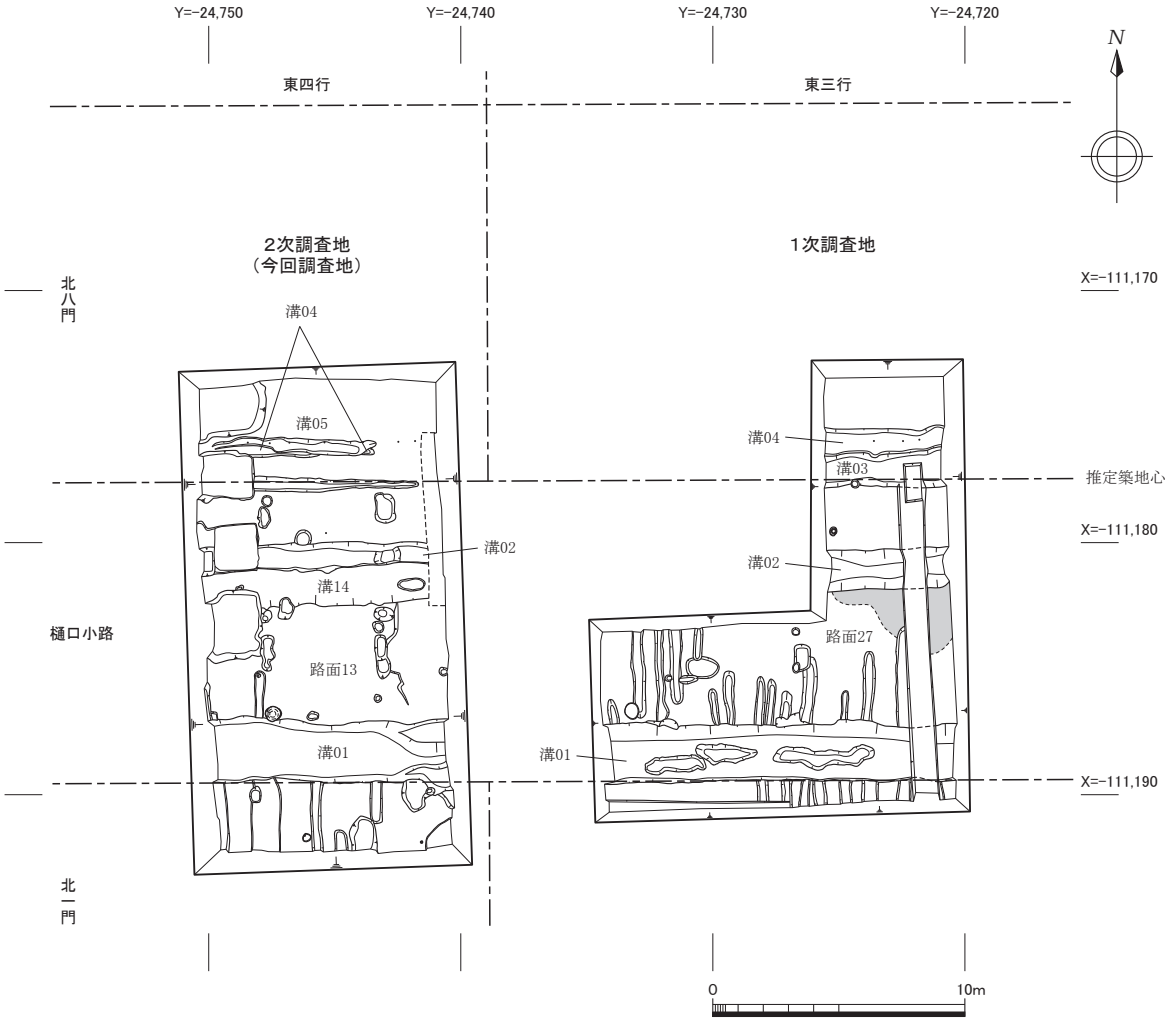


図22　1次・2次調査区平面図（1：300）

より完全に埋没したと考えられる。「1次調査」の所見では南側溝の溝底レベルの状況から、当時の水流方向は東から西に向かい、宇多小路を経て、最終的には流路化していた馬代小路の一部を南下するように京域外へ排出された可能性が高かったのではないかと推定している。今回の溝01の溝底レベルは標高22.42～22.63ｍを測り、「1次調査」の溝01の溝底レベル22.61～22.74ｍや、更に東方の六条三坊二町の調査[(3)]の溝15の溝底22.85ｍ前後よりも僅かながらも低い傾向を示しており、上記の推論を補強している。

北側溝である溝02は幅1.1ｍ前後、深さ0.3ｍと、溝01に比して浅く小規模なもので、十分な排水能力を有していたとは考えにくい遺構である。よって溝の規模から判断すれば、当該地周辺においては造営初期から南側溝（溝01）が殆どの排水処理機能を担っていたと思われ、このことは「1次調査」の調査所見に於いても既に指摘されているところである。しかし溝01が徐々に埋没していく中、同時に埋没過程にあった北側溝にも排水機能をもたせる必要性が生じたようで、その再掘削と拡幅が試みられた。これが溝14である。当時幅6ｍまでに狭まっていた樋口小路を更に狭めても必要とされた施工であった。その時期は溝14の埋土から出土した灰釉陶器から9世紀末頃と推定される。ここで注目すべきは、こうした北側溝の拡幅行為は「1次調査」では全く認められなかったという点である。すなわち本拡幅工事は少なくとも東方へ延びるものではなく、限

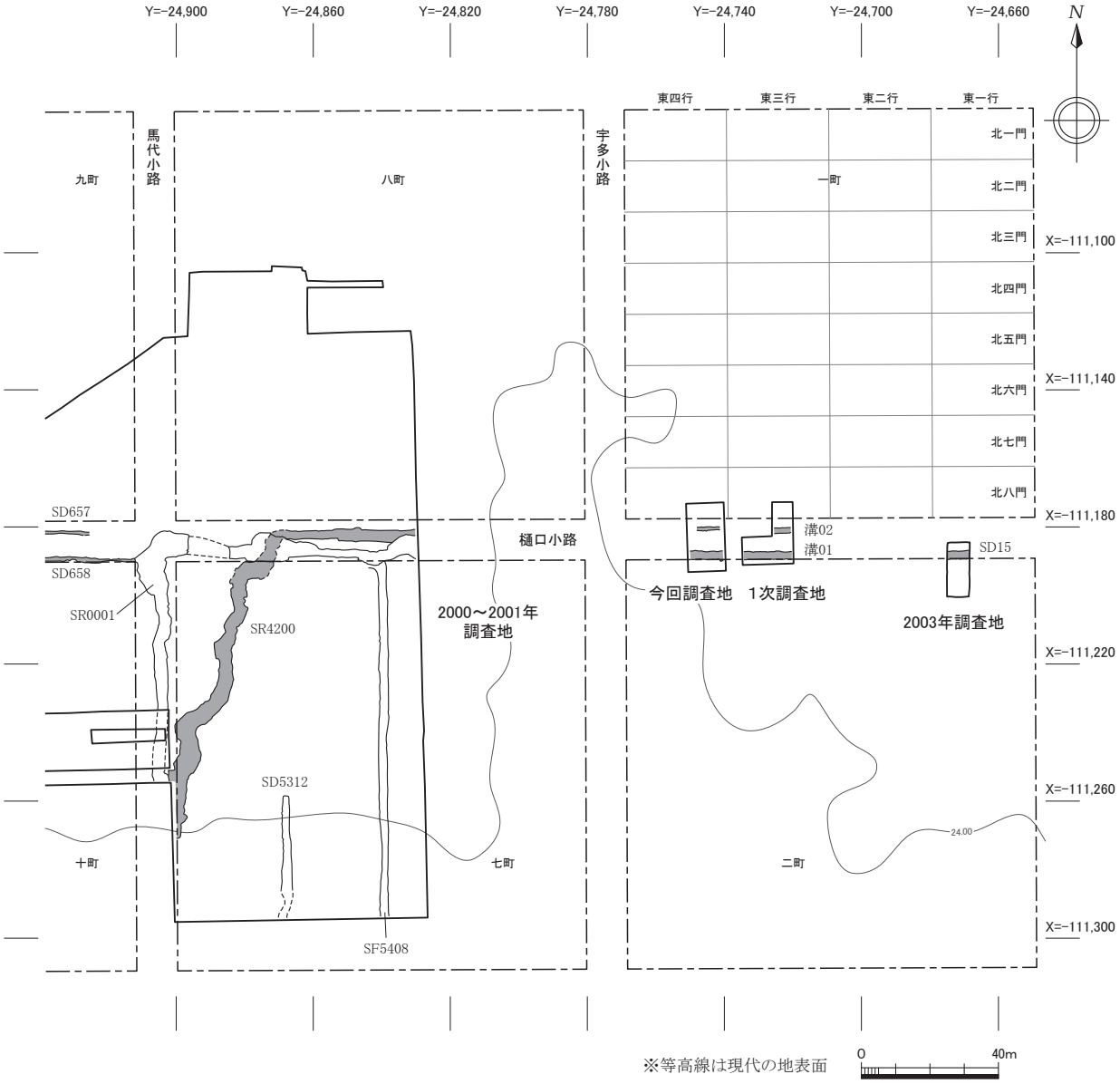


図23　既往調査区検出遺構との関係（1：2,000）

定された範囲のみで行われたものであり、極めて私的に行われた行為という印象を受ける。

こうした「1次調査」との非連続性は、一町側宅地で検出した築地の内溝においても認められる。今回の調査で検出した溝05がそれである。溝05の東端は調査区内で途切れており、「1次調査」で検出された内溝（溝03・04）とは連続しない。また「1次調査」の内溝は、出土遺物から溝05とほぼ同時期の遺構と推定されるが、先に掘られた溝03が溝04により大きく拡幅された形態をとり、最終的な溝幅は約2.5mと、溝05の約4倍にも及んでいた。以上のような相違が生じた要因について考えた場合、各遺構が変容する位置が東三行・北八門と東四行・北八門の境近くに当たっていることは暗示的である。これはあたかも、四行八門制による東西の宅地班給者の違いを表しているようにも見受けられるのである（図23）。そこで周辺の宅地分割の実態がどのようなものであったか目を向けてみたい。本調査地に近い右京六条三坊七町では、町内を東西に2等分する南北の小径（SF5408）と共に、東三行と四行を区画する南北溝（SD5312）が[4]、同四町では

町内を南北に２等分する東西の小径や[5]、北二門と北三門を区画する東西溝（溝35）が検出されている[6]。また同八町では、主要建物の配置や園池の存在から一町占地の宅地があった可能性が指摘されているが[7]、建物域を貫くように東二行と三行を区画する南北柵（柵列６）[8]や、北四門と五門を区画する東西柵（SA９）[9]が検出されていることから、ある時期には宅地の分割が行われていたと考えられる。さらに十町では東二行と三行を区画する南北溝（SD3345、2429、4350）や、北四門と五門を区画する東西溝（SD4340）なども検出されている[10]。上記は何れも平安前期から中期の遺構とされるので、こうした事例から判断すれば、当時の「右京六条三坊」地内では少なくとも１/４町乃至１/８町を単位とする班給が実際に行われており、中小規模宅地が多く営まれていたと想定できる[11]。よって今回のケースについても宅地分割の一事例である可能性は十分に考えられるが、限られた範囲の調査であり、本推論の可否については、今後データをさらに積み重ねた上で慎重に判断する必要があろう。

尚、溝05埋没後に再掘削された溝04については、出土遺物から13世紀の遺構と考えられ、両者には明確な時期差が存在する。しかしこの掘削の位置や規模は溝05とほぼ一致していることから、鎌倉時代に入ってもかつての土地区画に対する意識が何らかの形で遺存していた可能性を示唆している。

ところで、樋口小路北側溝である溝02の北肩と溝05の南肩ラインの距離は3.5ｍ前後を測る。「延喜式」の規定では、道路側溝に沿って幅三尺（約0.9ｍ）の犬行、さらに犬行端から築地心まで2.5尺（約0.75ｍ）とある。つまり築地基底部の幅は約1.5ｍとなるので、溝02 - 溝05間の空間は犬行、築地を設けるだけの記述どおりの幅を有していることが判る。しかし今回も「１次調査」に続き、築成土などの痕跡は全く認められず、掘立柱塀を示すような柱穴列なども検出することはできなかった。また溝01の南、二町側（A-５区～C-５区）でも築地の痕跡は認められず、寧ろ９世紀の遺構と考えられる土壙10が築地の基礎想定範囲内より検出されている。このように平安時代における一帯の区画施設の実態については判然としないが、瓦の出土が極端に少ないことから、仮に築地が存在していたとしても、周辺では築地に瓦の使用は無かったものと考えられる。

条坊関連遺構以外では、近代のものを除き、南北に掘られた耕作溝が僅かに認められたのみである（溝07、08、09、12、16）。埋土からの遺物が少なく、明確な時期の把握には至らなかったが、溝01が完全に埋没した後の遺構であることは確実であり、「1次調査」における所見に基づけば、10世紀中葉から11世紀代に作出されたものと推定される。この頃から右京域が急速に衰退し、一帯の巷所化が進んだことを物語るものといえよう。

以上、今回の発掘調査は220㎡という限られた範囲で実施したものであるが、「1次調査」に続き、平安前期の樋口小路に関する良好な条坊遺構等を検出することができ、平安京研究において新たな知見をまた一つ得ることが出来たといえる。ただし西院遺跡については、今回もその実態解明に繋がるような遺構を検出することはできなかった。今後周辺の調査がさらに進展し、様々な歴史的課題が一層解明されることが期待される。

註

（１）『平安京右京六条三坊一町跡・西院遺跡発掘調査報告書』（株）文化財サービス　2021年

（２）『平安京右京六条三坊－平安京跡研究調査報告第20輯』（財）古代学協会　2004年

（３）「平安京右京六条三坊二町跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2003年

（４）註２に同じ。SD5312は北五門より南で見られ、北四門以北では検出されていないため、東四行、北五～八門に亙る１/８町の宅地班給が存在した可能性が考えられる。

（５）SD20とSD21の２本の溝に挟まれた幅２～３ｍ、検出長約28ｍの空間が東西の区画道路として機能していたと報告されている。「平安京右京六条三坊」『昭和61年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1989年

（６）溝35は東側で行われた1981年度の調査（「平安京右京六条三坊」『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1981）では検出されておらず、東三行内で収束すると予想されることから、溝35より北側の宅地は東三・四行、北一・二門に亙る１/８町の規模が想定されている。『平安京右京六条三坊四町跡』（公財）京都市埋蔵文化財研究所　2020年

（７）註２に同じ。

（８）柵列６は北二門内で検出されている。「平安京右京六条八町」「『平成２年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994年

（９）註２に同じ。SA９は東四行内で検出されている。

(10) 註２に同じ。前者は部分的に失われているが北一門から四門まで検出されている。また後者は東一行から二行にかけて検出されており、溝の東端は馬代小路西側溝と連結する。

(11) 平安京における中小規模宅地の検出例では、右京二条、三条、六条周辺に多いとされ、特に六条の場合、西市が近いため多くの人が集住していたことを示している可能性があるという。家原圭太「庶民の宅地」『平安京 - 京都市文化財ブックス第28集』京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 2014年

図　　版

1．調査後の調査区の景観（北から）

2．調査後の調査区（真上から・上が西）

図版2　遺構

1．調査完了後の調査区全景（北から）

2．調査完了後の調査区全景（南から）

1．調査完了後の調査区全景（北東から）

2．完掘後の路面13、溝01、溝02、溝14（西から）

図版4　遺構

1．溝01完掘状況（東から）

2．溝01完掘状況（西から）

3．溝01埋土観察ベルト（西から）

1．溝01東端（調査区東壁面）埋土断面（西から）

2．溝01東側観察ベルト埋土断面（西から）

3．溝01西側観察ベルト埋土断面（西から）

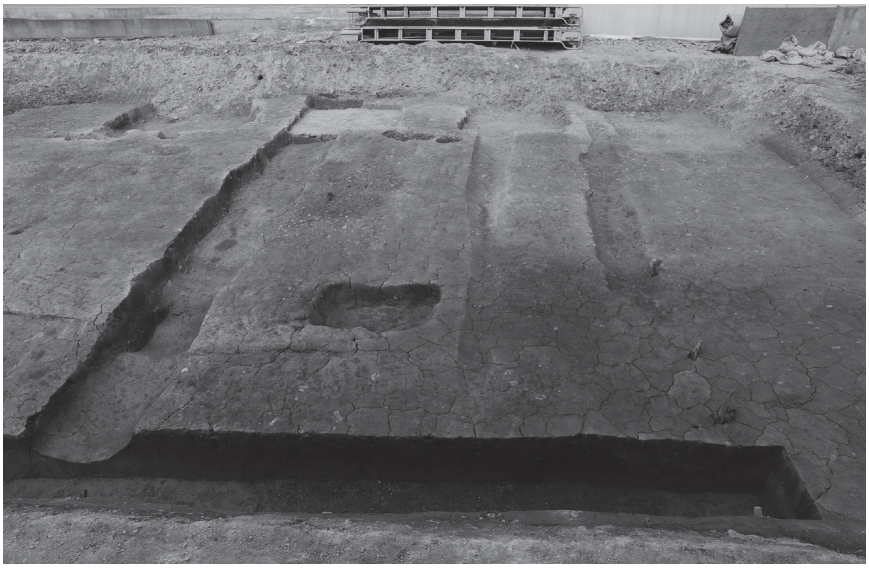
図版6　遺構

1．溝02、溝14完掘状況（東から）

2．溝02、溝14完掘状況（西から）

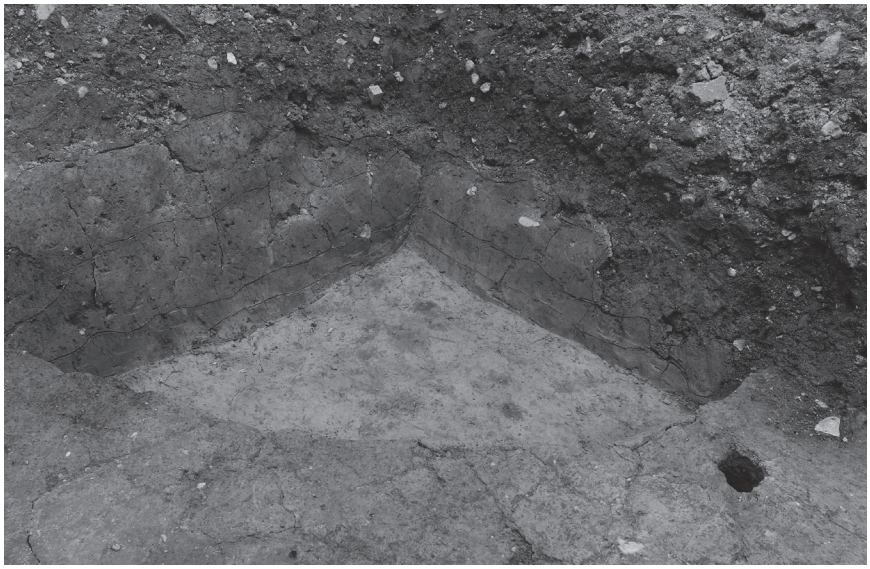
3．断ち割り後の路面13（西から）

1．溝04、溝05完掘状況（西から）

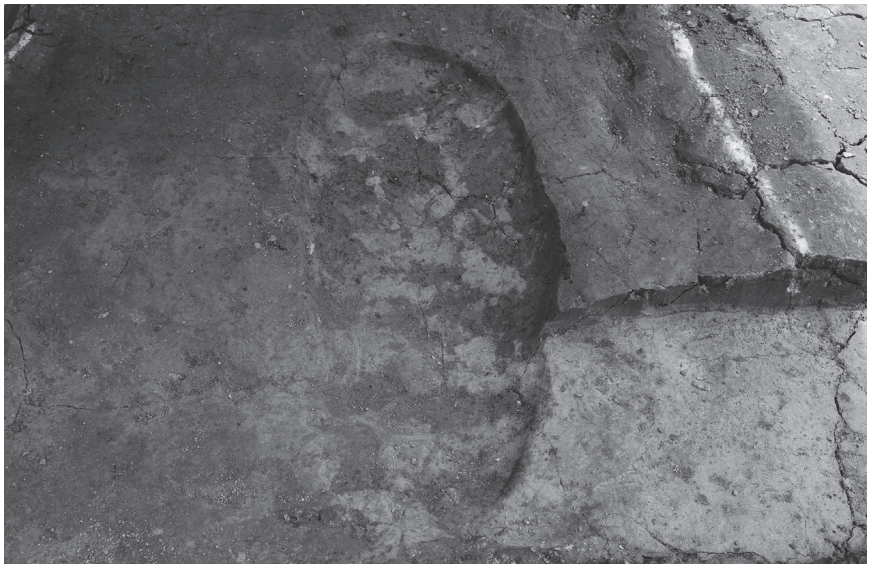


2．溝02、溝11、溝04、溝05（西から、溝14検出前）

3．溝07、溝09、溝08完掘状況（東から）



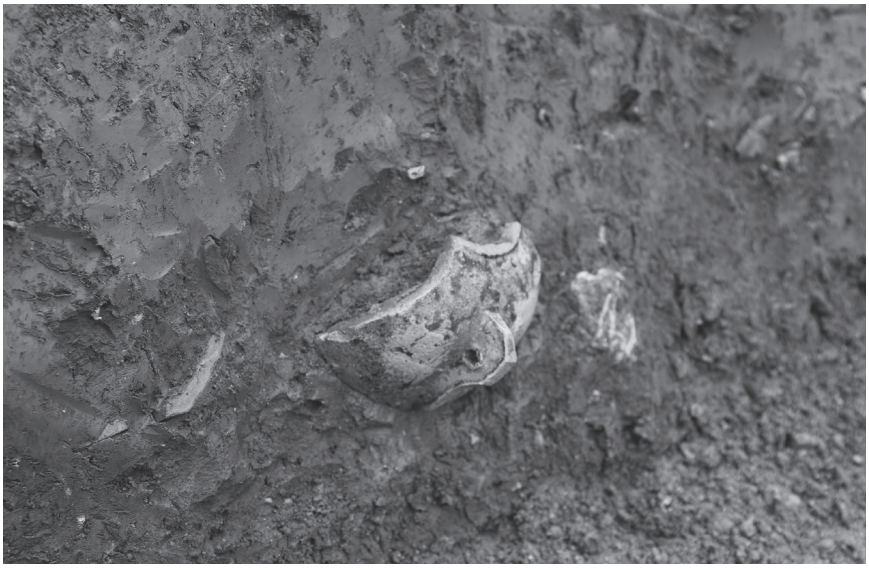
1．土壙10完掘状況（北西から）



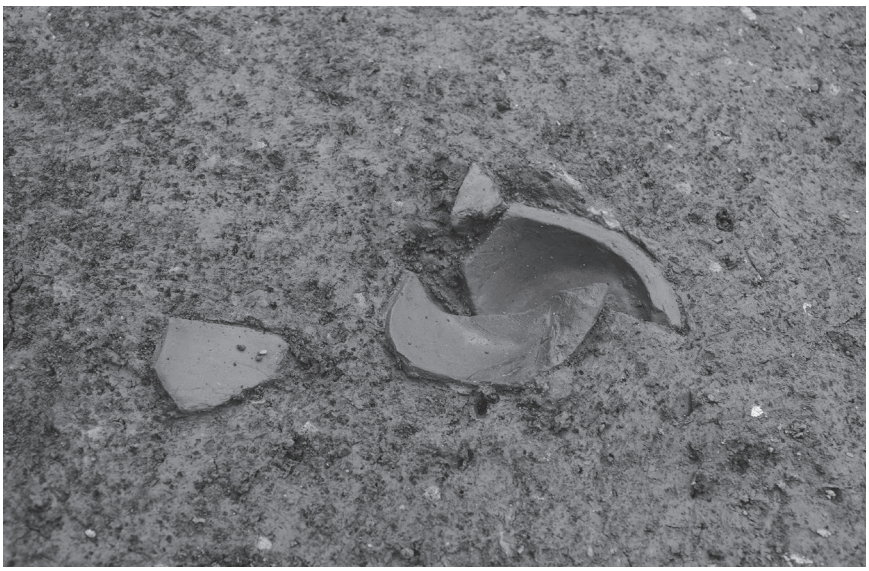
2．土壙15完掘状況（西から）

3．埋め甕06（西から）

1．須恵器壺Ｍ出土状況（溝01埋土上層）

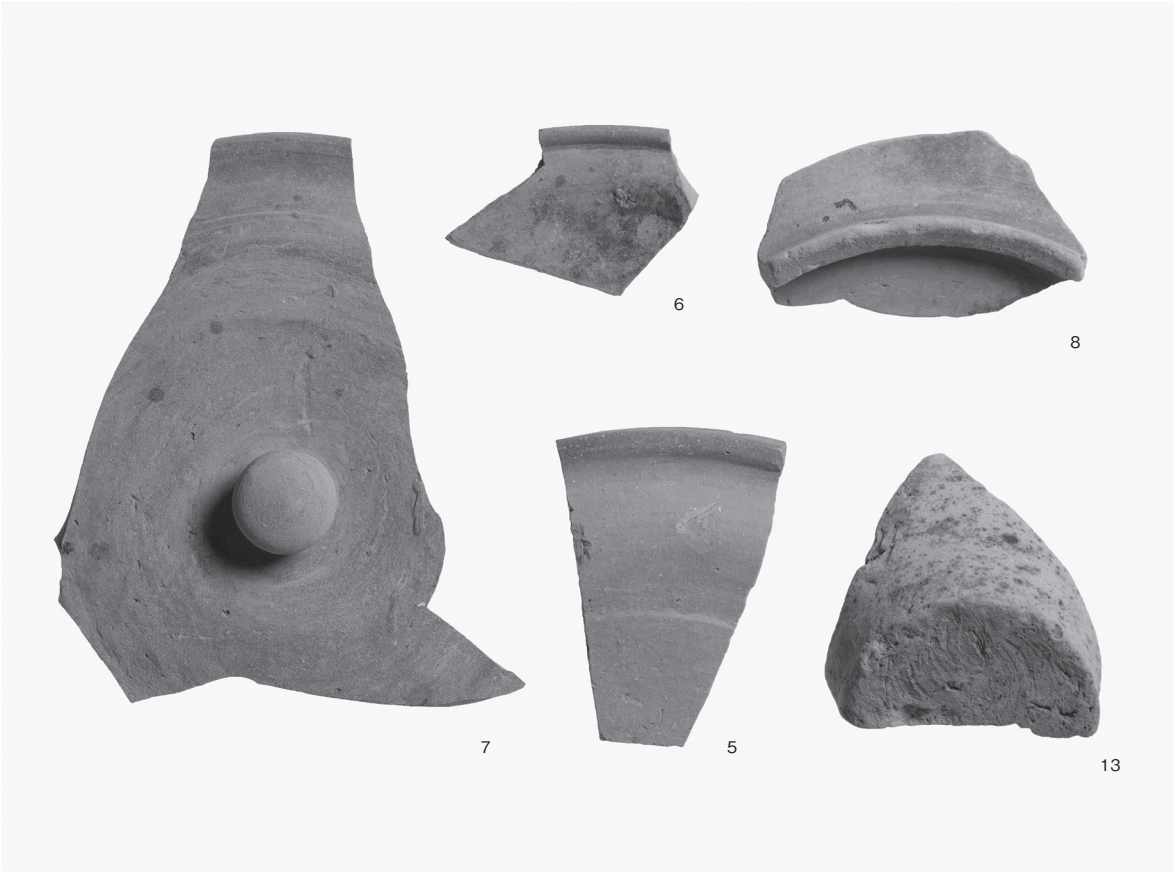


2．須恵器壺Ｎ出土状況（溝01埋土上層）



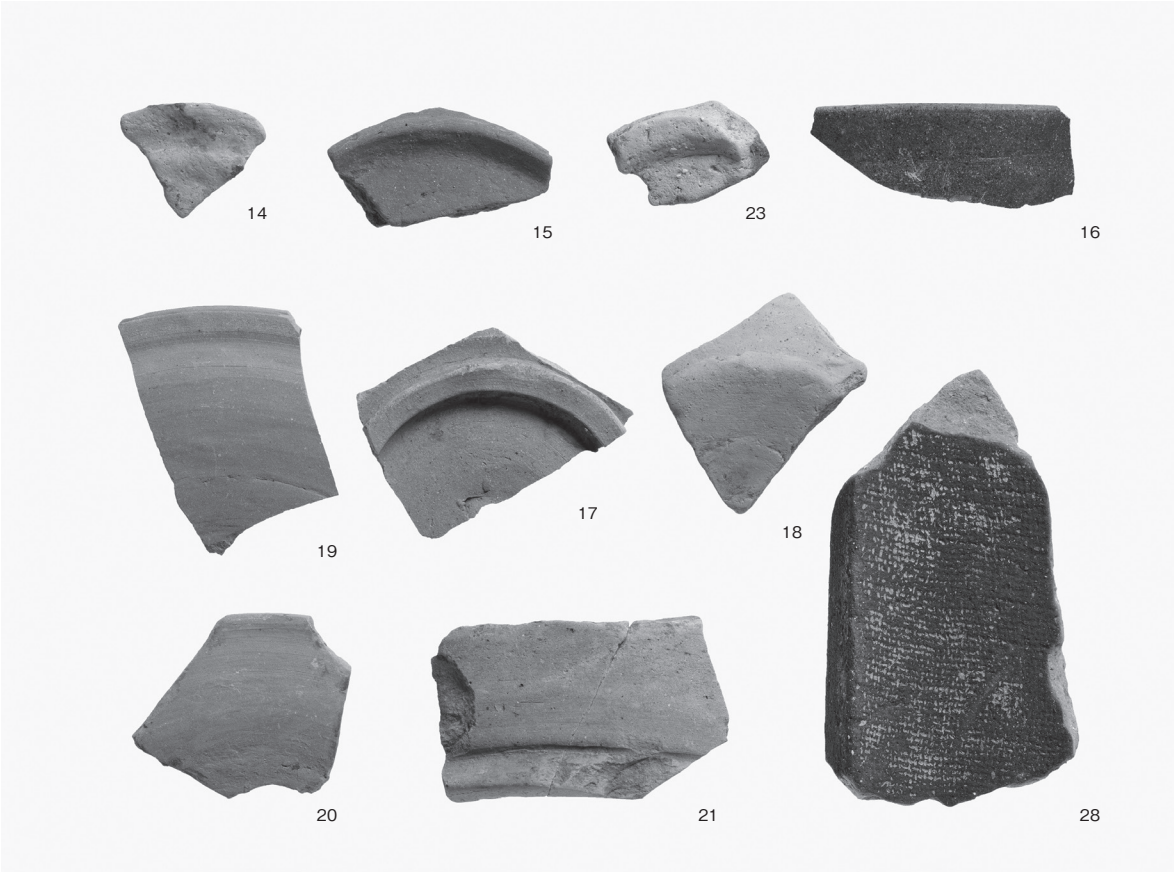
3．須恵器壺出土状況（路面13上面）

1．溝01埋土下層出土（1～4・9～12）

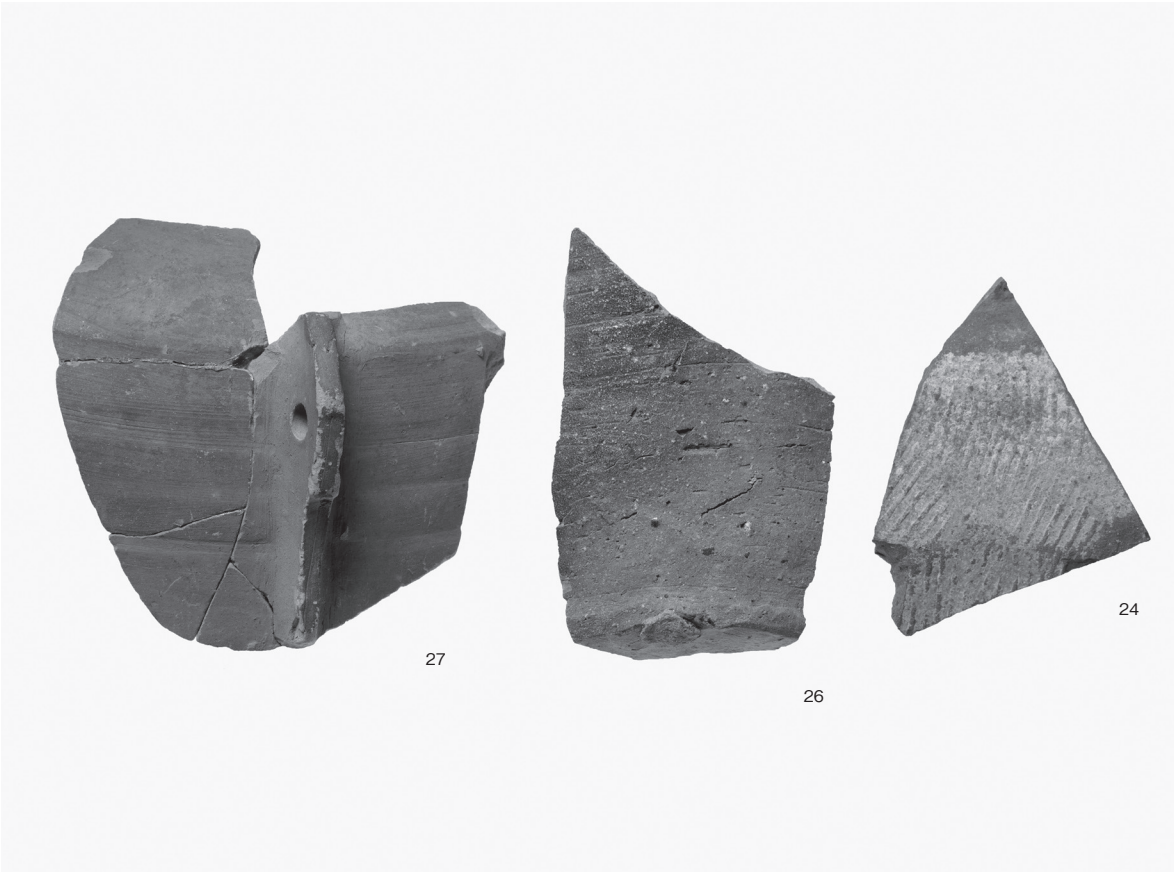


2．溝01埋土下層出土（5～8・13）

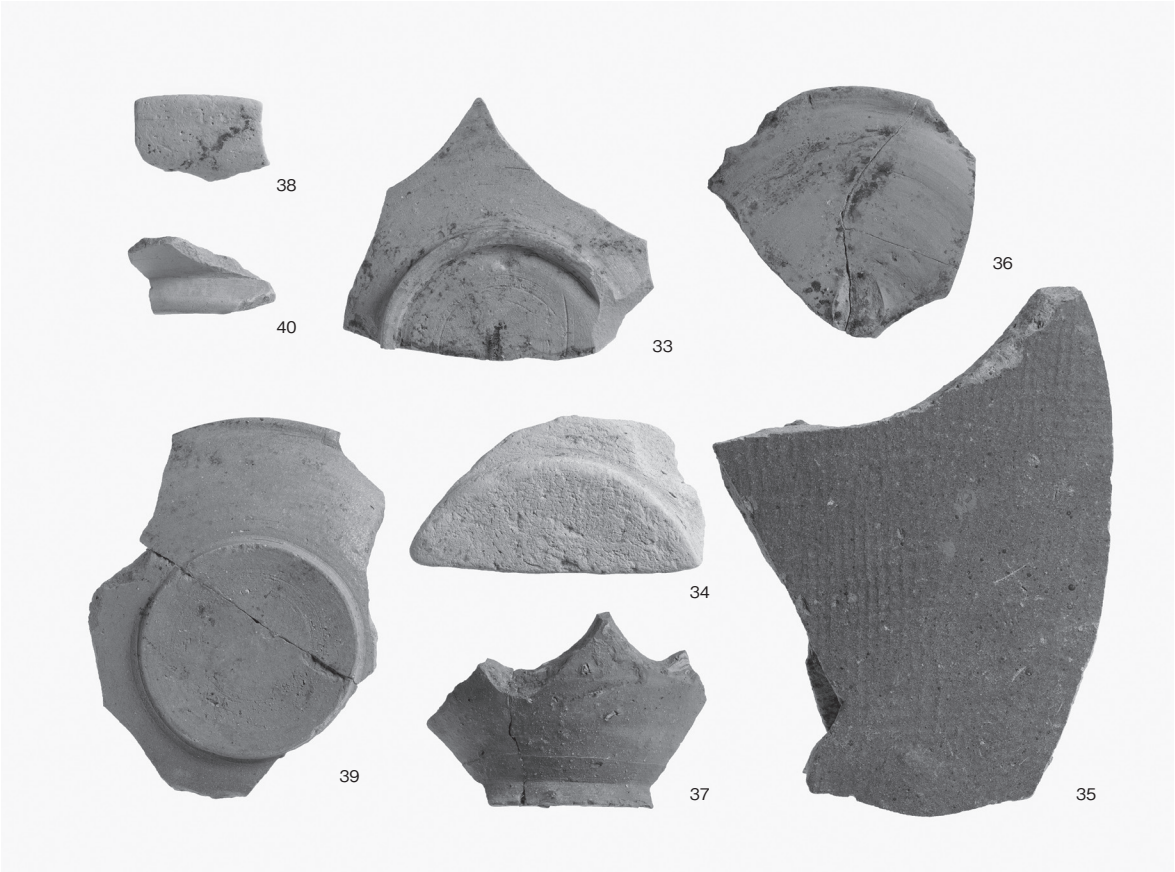
1．溝01埋土上層出土（25）、路面13出土（48）



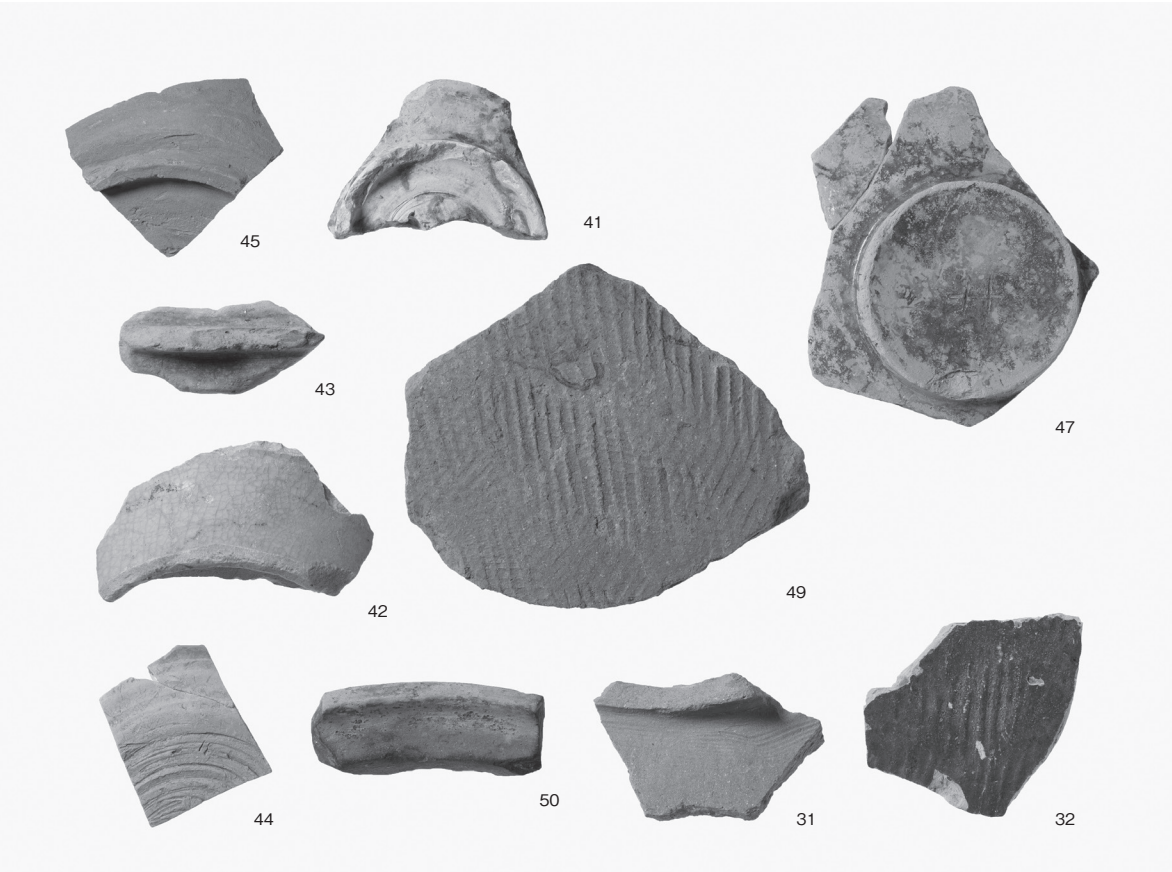
2．溝01埋土上層出土（14～21・23・28）



1．溝01埋土上層出土（24・26・27）

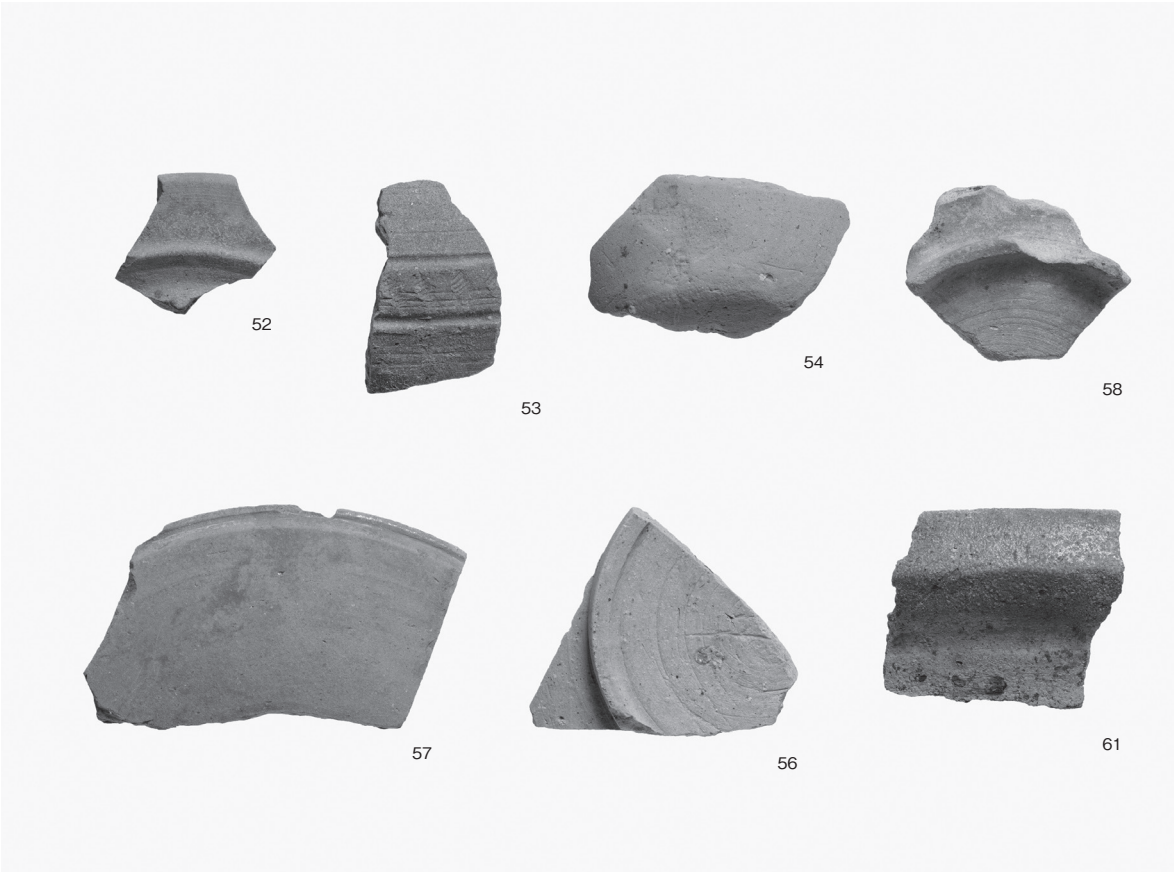


2．溝02埋土出土（33～35）、溝14埋土出土（36～40）

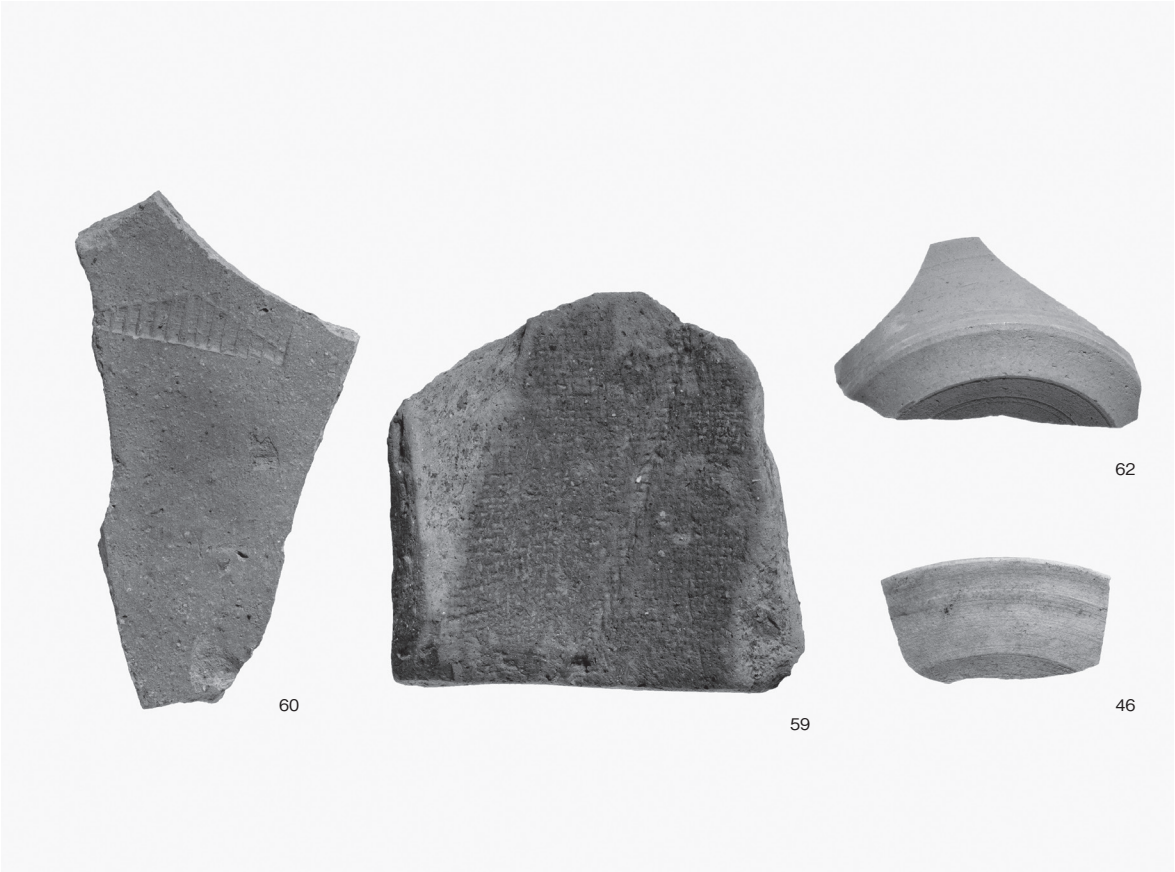


1．溝01埋土上面出土（31・32）、溝04埋土出土（41～44）、溝05埋土出土（45）、土壙10埋土出土（47）路面13出土（49・50）

2．溝01埋土上層出土（22）、包含層出土（55）



1．包含層出土（52～54・56～58・61）



2．溝11埋土出土（46）、包含層出土（59・60・62）

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょううきょうろくじょうさんぼういっちょうあと・さいいんいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	平安京右京六条三坊一町跡・西院遺跡発掘調査報告書（Ⅱ）
シリーズ名	文化財サービス発掘調査報告書
シリーズ番号	第19集
編著者名	山内伸浩　野地ますみ
編集機関	株式会社 文化財サービス
所在地	〒612-8372 京都市伏見区北端町58
発行所	株式会社 文化財サービス
発行年月日	2021年10月29日

所収遺跡名	所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平安京右京（へいあんきょううきょう） 六条三坊（ろくじょうさんぼう） 一町跡（いっちょうあと） 西院遺跡（さいいんいせき）	京都市右京区（きょうとしうきょうく） 西院西寿町（さいいんにしことぶきちょう） 23番、23番1 24番1	26100	1 930	34度 59分 50秒	135度 43分 443秒	2021年 6月26日 ～ 2021年 8月4日	220㎡	社屋建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京右京六条三坊一町跡 西院遺跡	都城 集落跡	平安時代 鎌倉時代	路面（樋口小路） 樋口小路南北側溝 築地内溝 土壙 耕作溝	土師器 須恵器 緑釉陶器 灰釉陶器 黒色土器 中国磁器 瓦	平安京の樋口小路の路面、南北両側溝、北側築地の内溝など平安前期の遺構を検出した。南北両側溝は共に拡幅の痕跡が認められた。南側溝の埋土、出土遺物の分析から、これらの条坊遺構は9世紀初めには造られ、10世前半には溝の埋没により、徐々に機能を失っていったことが推定された。 また側溝埋没後には路面及び犬走部の一部が巷所化したことを物語る耕作溝群も検出された。 西院遺跡に関する遺構、遺物については殆ど確認できなかった。

文化財サービス発掘調査報告書第19集

平安京右京六条三坊一町跡・西院遺跡
発掘調査報告書（Ⅱ）

発行日　2021年10月29日

株式会社　文化財サービス
編　集　〒612-8372 京都市伏見区北端町58
TEL 075-611-5800

三星商事印刷株式会社
印　刷　〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下る
TEL 075-256-0961